

交野市「平和と人権を守る都市宣言」一〇周年

あなたへ 真実からの伝言

― 感動と生きる喜びを ―

平和の礎

いしずえ

交野在住者戦争体験集

第三集



「平和の礎」第三集発刊にあたって：

この小冊子は、交野市「平和と人権を守る都市宣言」一〇周年にあたり、前二集発行に続き、公募に応じられた方がたの戦争体験記を収録したものです。

第一、二集と共に、平和日本の礎となられた多くの御霊に捧げ、あなたを始め、現在・未来を生きる方がたにお伝えします。

交野市「平和と人権を守る都市宣言」を進める実行委員会

(会長 可児義明)

目次

発刊にあたって

▽寄稿(敬称略)

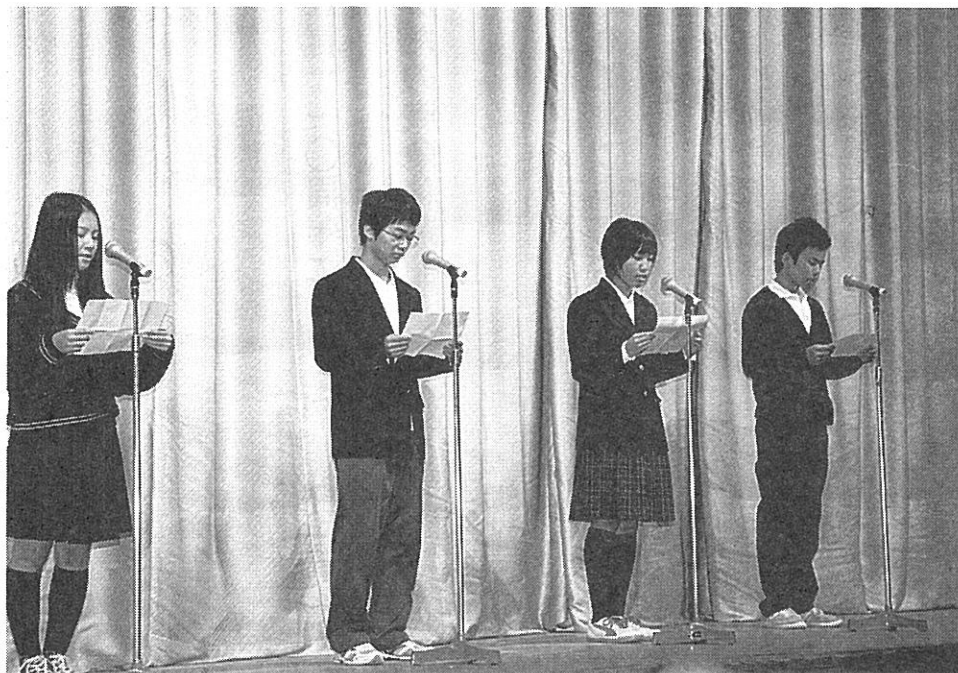
亥埜敏子(私市山手) 戦時中のこと	3
神原敬夫(妙見東) 暑い夏に想う ―私の戦時体験―	4
可児義明(妙見坂) 激動の時代を生きて	12
黒田昭二(倉治) 連合艦隊最後の決算(比島沖最後の決戦)	17
住井麗子(妙見坂) おもなでぎごと	18
千本忠一(私市) 明日への一言	22
橘順一(松塚) 支援と終戦前後の障がい者	24
土井正臣(星田山手) 「あっ! グラマン戦闘機が」	25
増田厚三(私部南) 太平洋戦争体験記	28
水上隆邦(私市) 『祖国の土はふんだが』	32
森本博秋(神宮寺) 語りつぐ大東亜戦争	34
渡邊芳治(倉治) 嵐は過ぎれど	40
交野市市制施行40周年記念事業から	41
交野の平和と戦争関連モノメントから	42
交野市「平和と人権を守る都市宣言」(日本文および英文)	44
あとがき	46

題字 渋谷正

挿し絵 伊坂真三 牧田健次 可児義明

表紙 「コスモス」は、秩序と調和ある宇宙を意味することは。

花のコスモスは秋の桜とも呼ばれます。



「平和と人権を守る都市宣言」10周年にあたり、市内中学生による宣言朗読
(平成23年11月3日 交野市市制施行40周年記念式典会場にて)

戦時中の日々

亥埜 敏子（私市山手）

私は、戦争の真只中で、小学生生活を大阪市立桜宮小学校で送りました。

入学当時、児童数三千人のマンモス小学校が、戦時中、集団疎開や縁故疎開をして、卒業する頃には、残留生徒が、六百人程度になっていました。私は残留組で、国道一号線沿いの東野田町五丁目（京橋の近く）に自家がありました。近くには、大川（淀川）の桜宮公園があり、銀橋の下で、近所のみんなど壘を作っていました。砂地の為、落花生を沢山植えていたのを、良くおぼえています。

「月月火水木金金」の時代で、私達小学生も、一生懸命働きました。軍馬に与える草刈は、子供の仕事でした。その頃の野江、蒲生は原っぱで、今では想像もつかないでしょう。食べ物、すべて配給制で、並ぶのも子供の役でした。

あちこちの道端で、千人針をお願いするご婦人の姿が多く見られる様になった頃、夜は灯火管制の規定が設けられ、大きな真っ黒いカバーを電灯に被せて、息を殺して過ごしていました。家族

が、ビクビクしながら寄り添って、暮らしていたものです。

そして、昭和二十年六月七日、焼夷弾と、機銃掃射の襲撃に依って、私達の町は壊滅的な被害を受け、命からがら、逃げて助かりました。

この空襲で、両親を亡くされた方が、過日の同窓会の席で話されていたのですが、火葬場も空きが無く、あの桜宮公園で、薪を拾って来て、自分達で仕末をしたとの事です。

このような悲惨な戦争は、もう絶対に起こしてはなりません。私達戦中派が、声を大にして、訴え続けなければいけません。



神原敬夫(妙見東)

はじめに

戦争の惨禍を忘れまいとして戦争を語り継ぐ運動も長らく続けられてきました。その力は徐々に広がりを見せ、今年も、マスコミで、元兵士や市民の戦争体験が取り上げられ、いくつかの優れたドラマなども放映されました。

しかし、マスコミの取り上げる話は、大衆の共感を呼ぶドラマ性のある話に限られ、その多くは、「悲惨さ」の強調だけで終わっているように思えます。負け戦さゆえの悲惨さ、それは言語に尽くせないものがあり、再び経験したくない、させたくないという感情で一杯になります。それは、あまりにも「受動的で無力な民衆」という視点で覆いつくされているようで、もう一つ満たされないものを感じてきました。

語られる戦争体験の中には、「加害者」として現地人にたいして行った残虐な仕打ちなどに対するの告白もないわけではありませんが、だいたい、戦闘や飢餓といった極限状況がなせる業のごとくに描かれています。また、一般的に戦争責任を糾弾している加害者論の多くは、加害者は国・為政者、特に強権的な軍部によ

る強権によるものであって自らは被害者か、せいぜい加害者の側に立ったという主張に過ぎず、とかく第三者的な立場からのものとなっているようです。

第二次大戦になだれ込む日本国内の流れは軍部の暴走だけが作り出したものではありません。特に軍国主義の被害者とされがちな女性や年少者が、実は熱心な戦争支持者だったことを抜きにしては、真に戦争への道筋をたどることはできませんし、平和への展望に結びつかないのではないのでしょうか。

一九三一年生まれの私は、戦争の本当の姿には接していませんし、幾分かでも記憶にあるのは小学校入学くらいですから、体験したのもわずかな年月に過ぎません。これまで、その平凡な体験が何かの役に立つように思われませんでしたから、人様に分の戦争体験を語ろうなどとは考えてもみませんでした。

しかし、だんだんと、戦争の真の姿を知る人たちは少なくなつた今日、戦争を知る最後の世代としてなにか役に立てばとの思いで、私の少年時代の体験を記してみようと思えます。

1 父の戦死

私の父は、たたき上げの軍人でした。「たたきあげ」というのは兵から下士官を経て将校になった軍人のことです。一般的な将校への道は、中学校から、士官学校を経て、二十歳ぐらいで少尉として任官します。それから数年たてばみんな少佐にまでは

なるというコースです。

丁度私が生まれたとき、父は三十代半ば、士官学校の「学生隊」で勉強していました。まもなく起こった「満州事変」にも出征し、一九三三年に凱戦したものの腎臓病に冒され、しばらく寝ていたようですが、私が物心つく頃には元気になっていました。

その、父の記憶はほんのわずかしかなかった。朝、当番兵が父を迎えにやってくるまで、馬に乗って出かけていたこと、夕食後、一緒に銭湯に出かけたこと、ぐらいです。私の知る父の顔は、たぶん仏壇に飾ってあった写真によるものでしょう。

一九三七年七月、「盧溝橋事件」が起こり、連隊は早々に出勤を命じられ戦地に赴くことになりました。その日、市民はみんな通りに出て小旗を振って出征する兵士たちを見送りました。行進する隊列の馬上に父を見つけた私は、大声で「お父さん」と叫んでいました。それが、父との最後の別れとなりました。出征から半年後の四月末には、戦死を知らせる電報を受け取ることになったのです。

八月、父は遺骨となって帰ってきました。遺骨は、連隊に届けられ、連隊主催の合同慰霊祭が行われました。遺族たちの葬列は、「国の鎮め」のラッパに導かれ、連隊から久松山の麓の仁風閣まで約三キロメートルの道のりを市民の見守る中、行進しました。

私は、父の遺骨を胸に、炎天下の道をしらずと歩んでいきまし

た。

2 戦時下の少年

日中戦争は宣戦布告なしにずるずると拡大していった戦争です。しかし、子どもにはそんなことは分かりません。八月には上海を占領、十月までには北支の殆どが占領地区として赤く塗られた地図などを見るようになります。十一月に南京が陥落すると旗行列・提灯行列が行われ、万歳、万歳が叫ばれました。子どもたちも「勝った、勝った、また、勝った」とはやしました。

勝って 来るぞと 勇ましく 誓って 国を 出たからに
や

手柄 たてずに 死なれよか 進軍ラッパ 聞く度に
まぶたに 浮かぶ 旗の波

露営の歌は一九三七年末のヒット曲で、子どもたちもよく口ずさんだものです。

政府は、支那を懲らしめるのだといい、新聞も侵略戦争を賛美、「百人切り競争」報道などと大虐殺も勲功として賞賛しました。そのような中で、子どもたちは中国人や朝鮮人を蔑視し、人をもとも思わないことが当たり前と思うように育てられました。

雲わきあがる この朝（あした） 旭日のもと 敢然と
正義に立てり 大日本 とれ 膺懲（ようちよう）の 銃と
剣

一九四一年、太平洋戦争が勃発すると、戦時の高揚を狙った文化攻勢が強められ、殆どの文化人が協力していきました。子どもたちは容易にそれに乗せられていきます。子どもに大きな影響を与えたのが、四大節（旗日）に行われる儀式、「紀元二六〇〇年賛歌」「加藤隼戦闘隊」「月月火水木金金」などの歌と「少年倶楽部」などの雑誌です。

四大節とは、元旦の四方拝、紀元節、天長節、明治節で、この日は、儀式だけで授業はありません。講堂の壇上正面にはご真影が飾られています。式は君が代の斉唱で始まり、校長が「朕惟フニ：。」と教育勅語を読み上げる間、子どもたちは、下を向いて御名御璽という言葉を待っています。

当時を過ごした人々に強い印象を残しているこの行事は天皇への忠誠を植えつける上で大きな役割を果たしました。

大衆を巻き込んだ戦争を遂行するためには、相手の国・民族の人格を認めない、貶めるという心情を醸成しなければなりません。すなわち、人間を獣に変える教育が欠かせないということになります。しかし、そう認識させない仕掛けが、人間を超えたものに対

する畏敬の念です。神社へ参詣し奉仕する活動が強制されたのもその故でしょう。それは、現人神を信ずることへと通ずるものでした。

戦時体験のもっとも大切な教訓は、教育によって、多くの国民が人間への尊厳を失ってしまったことへの反省ではないでしょうか。

3 国民学校令、中等学校令

ニッポン ヨイクニ ツヨイクニ セカイニ ヒトツノ カミノクニ（修身巻2）

一九四一年、勅令により、尋常・高等小学校は国民学校へと代わります。国民学校の目的は、「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」と、されました。

修学旅行は伊勢神宮だけが許されていました。

一九四二年ごろには戦局も厳しくなり、田舎町でも英霊の帰還を迎えるため、授業を中断して駅前には並ぶというようなことも起こってきます。

一九四三年春、中学校に進学しました。この年、中等学校令が発令され、内容も大きく変わりました。これがいかに軍国色の強いものであったかは、左の中学校規定を見れば明らかでしょう。

制服は学生服ではなく、カーキ色の戦闘服に戦闘帽で、ボタン

は陶器で出来ていました。登下校には必ずゲートル（巻袈裟）をしなければなりません。修練の時間は、肥担桶を担いで畑に撒くなどの農作業でした。柔剣道は必修です。

中学校には、配属将校による教練が必修で、上級生では三八銃を担いで模擬演習や実弾訓練もありましたが、一年生には、退役の下士官による、行進の訓練や銃剣術の練習が行われたぐらいです。

体験記には、当時の学校が耐え難いものであったように書かれたものが多いのですが、私の経験した一九四三年はまだそれほど緊迫したものでなかったせいも、配属将校が威張り散らすとか、教師や上級生から殴られたという経験もありませんでした。それには、三木校長の人柄の影響があつたのかもしれない。三木校長は英文科の出身で、一九二九年から一九四八年まで十九年間も一中の校長をつとめた人ですが、良識の人で、講話の中に戦争賛美の言葉を聴いた覚えはありませんでした。



中学校規程（抄）昭和十八年三月二日

第一章 総則

第一条 中学校ニ於テハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ヲ奉体シ中等学校令ノ本旨ニ基キ左ノ事項ニ留意シテ生徒ヲ教育スベシ

一 教育ノ全般ニ亘リテ皇国ノ道ヲ修練セシメ国体ニ対スル信念ヲ深メ至誠尽忠ノ精神ニ徹セシムベシ

二 皇国ノ東亜及世界ニ於ケル使命ヲ明ニシ皇国民タルノ責務ヲ自覚セシメ職分ヲ尽シテ皇運ヲ扶翼シ奉ルノ信念ト実践力トヲ涵養スベシ

三 学行ヲ一体トシテ心身ヲ修練セシメ皇国民タルノ徳操識見ヲ陶冶シ創造活用ノ能ヲ養ヒ堅忍不撓ノ体力氣力ヲ鍊磨スベシ

四 挙校一体修文練武ニカムルノ風ヲ振作シ質実剛健ヲ尚ビ協同ト勤勞トヲ重ンズルノ氣風ヲ作興スベシ

五 教育ヲシテ国民生活ノ實際ニ適切ナラシムルト共ニ実践体験ニ依ル学習ヲ基礎トシテ自發研究ノ態度ヲ育成スベシ

六 教育内容ノ全体的統一ニ意ヲ用ヒ学校内外ノ生活ヲ挙ゲテ皇国民鍊成ノ一途ニ歸セムベシ

第二条 中学校ニ於テハ教科及修練ヲ課スベシ（以下略）

修練ハ行的修練ヲ中心トシテ教育ヲ実践的綜合的ニ發展セシメ教科ト併セ一体トシテ尽忠報國ノ精神ヲ發揚シ獻身奉公ノ実践力ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス

4 将校生徒

中学一年生の秋、陸軍幼年学校を受験し、三月、合格通知が届きました。出発の日、小学校の同級生を始めかなりの町民が駅に見送りに来てくれましたが、出征兵士の見送りと同じように考え、涙してくれた人もあったようです。

東幼は、その春、戸山台から八王子の西に疎開していました。約三万坪の校地があり、小高い丘は雑木林で覆われ、神社も作られていました。

生徒舎は各期別に一棟（寝室十六室、自習室、その他）割り当てられ、一室に二十二人も生徒がベッドを並べて寝起きます。六時起床・点呼、ベッドを整え、洗面の後に、雄叫神社に参拝、東方遥拝、軍人勅諭の一部を奉読して、朝食に向かいます。食堂では全校生徒が着席、当番士官の合図で一斉に食事をします。

日曜日以外は、午前中四時間は教舎での学科授業、午後は、軍事教練、体操・武道で、中身としては中学校とさほど変わりません。中学の同級生たちが勤労働員などあまり勉強できなかったのと比べ、むしろ恵まれていたと思います。

午後四時頃から夕食までが自由時間です。

夜は、二時間半、自習室に缶詰で、十時消灯です。

生活の単位を訓育班といい、五十数名に、生徒監（大尉か少佐）一人、助手として班長（下士官）二名が午後の訓練及び生活の指

導に当たっていました。各部屋には模範生徒（三年生）が一名一緒に寝起きして生活指導に当たります。生活時間は決まっていますが、こまごました指導は全くありません。

体罰は禁止です。

一九四五年の冬は大変厳しい冬でした。最低気温は零下十三度にもなり、防火水槽には三十センチメートルの氷が張り、日陰の土地は霜柱で鶴嘴も打ち込めないぐらいでした。教室、自習室ではストーブが焚かれていましたが、寝室には暖房はありません。

食糧事情は、次第に悪くなったようで、高粱粥が出されたことがありましたが、民間に比べ、随分と優遇されていたことは間違いないありません。

5 空襲

東京の空襲は、二月から連日のように繰り返され、百数十回に及びました。

学校の上空は、東京への空襲の進路に当たりますから、空襲はいやというほど見せ付けられました。高射砲や、戦闘機による撃墜もたまに見られました。B 29は高度一万八千メートルぐらいを飛んできますから高射砲も届きません。

三月十日の東京大空襲の様子は、いまだに目に焼きついてます。B 29が編隊を組んで次々と轟音を響かせて東に向かい、その総数は三百五十機を越えていたということです。東の空は真っ赤

に輝き、その光を不気味に反射した機体から、次々と爆弾を投下していく有様は、丁度、ピカソのゲルニカを連想させます。

私が、直接に空襲を受けたのは三度です。

最初は、五月二十五日、グラマンP51数機が学校の上空に飛来し、機銃掃射を加えてきました。私たちは、退避壕に身を伏せていましたが、大変低空で飛行し、反転したときには、操縦士の顔がはっきり見えるほどでした。特段に狙いを定めての空襲ではなかったようで、低空を速い速度で飛行するのですから、機関砲の玉が落ちるのは五十メートルに一発ぐらいで、被害はありませんでした。

二回めは、三日間の帰省が許され帰校する途中のことでした。七月二十七日、大阪から夜行列車に乗ったのですが、夜明けになって眼が覚め、気がつくと浜松の西、舞阪あたりで列車が止まったままになっています。浜松の街が空襲を受け、進めなかったのです。そのうち乗っていた列車が機銃掃射を受けました。あわてて飛び降り、車両の下にもぐりましたが、執拗に攻撃してきますので、浜名湖の近くまで逃げました。

八王子の街と幼年学校が空襲を受けたのは八月一日の深夜でした。

空襲警報で退避していたのですが、一向に現れないので寝室に帰って寝ていたところ、「空襲」という声で寝台から飛び起きました。すでに生徒舎には火の手が上がっています。服装を整え、鉄兜と銃だけを持って、急いで外に出ましたが、激しい空襲で消火どころではありません。

走って、丘の林の中まで逃げこみました。安全な場所はどこにもありません。なるようになれと、落葉の上に寝転んで上を見上げていました。煙に覆われた空から焼夷弾の雨がシュルシュルと不気味な音を立てて落ちてきては、ブスブスと地面に突き刺さります。落下したのはクラスタ―焼夷爆弾でした。

死をいとわぬ教育を受けてきたせいでしょうか。不思議と恐怖は感じませんでした。

爆撃は繰り返し繰り返し執拗に行われました。

ようやく夜が明けて、林から出てみると建物はすっかり焼け落ち、一面に焼夷弾の破片や不発弾が散らばっています。

この空襲では、生徒・教官十一人が犠牲となって死亡し、けが人も多数出ました。作りかけの防空壕は危険に満ちていたようです。

6 敗戦

八月十五日の玉音放送を聴いたのは、横山第一国民学校のグラウンドでした。焼け出された後、体育館を借り、そこで寝起きして

いたのです。ガーガーと雑音が激しく、よく聞き取れませんでしたが、敗戦を告げる放送であることは分かり、言い表しようもない衝撃が走りまわりました。

その後どうなるのかは誰にも分からず、不安な気持ちの何日かを過ごしていました。マッカーサーが相模原に降り立つ前にということで、八月二十六日に解散式が行われ、それぞれに我が家へと帰っていきました。

十月、もとの中学校への復学が許されましたが、困難だったのは、むしろ戦後の方でした。

外地に残された人々の苦労とは比べようありませんが、物資はなく、すべてが配給で、それもまともにはいただけません。米の代わりに、砂糖やとうもろこし、干し杏などが配給され、弁当の持参もままなりません。紙やノートもなかなか手に入りません、もちろん教科書は先輩からもらった古本です。ただ、学校にはかなりの量の用紙が蓄えられていて、先生たちがガリ版ずりの教材を作ってくれました。

停電続きで、ろうそくに頼っての生活です。夜はまともに勉強することが出来ません。試験勉強のため、駅の待合室を利用したこともありました。

ドラマなどでは、終戦を迎えて喜ぶ場面が創られています。た

しかに空襲の心配がなくなったのですが、おそらく、日本中が占領の恐怖と経済的困難の中で、不安な日々を過ごしたのではないかと思います。

おわりに

今年の夏は異常な猛暑でした。かんかん照りつける日差しを受けていると、父の遺骨を抱いて歩いた幼かった日、そして敗戦の詔勅を聞いた日のことがどうしてもよみがえってきます。私の平和を願う想いの深部には少年時代の体験が埋められているのだと思います。

しかし、このような体験が直ちに平和の希求へとつながったわけではありません。学習していく中でこそ、はじめて平和への願いを確かなものとすることができました。

今日、日本では政治の貧困、経済の停滞、生活の安全・安心が脅かされるという状況が続く中で閉塞感が漂い、ファシズムへと傾倒する危険がせまっているように思えます。

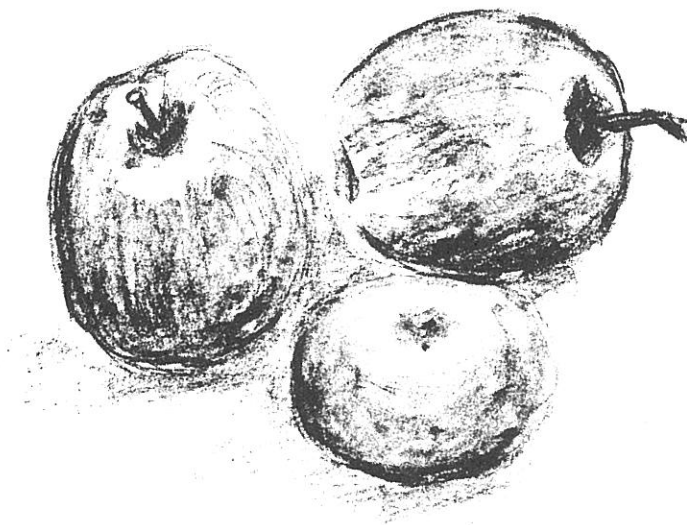
昨年暮れに決定した防衛大綱は、最近の北朝鮮の動向や中国の近代化が「透明性の不足」とあいまって地域・国際社会の懸念を引き起こしていると指摘。北朝鮮と中国からの潜在的脅威を見据え、冷戦時代の「基盤的防衛力」から、機動力や即応性を重視する「動的防衛力」へとシフトしました。

流れに抗して二〇〇四年には「九条の会」の発足を見、次第に

その影響は大きくなっています。核兵器廃絶の運動も力強さを見せてきました。一昨年のオバマのプラハ演説は希望を抱かせましたし、昨年は、初めて国連事務総長やアメリカ大使が広島の原爆記念式典に参加しました。

こうした地道な努力が平和の機運を世界にもたらしていることは間違いありませんが、平和への道筋は単調ではありません。真の平和を希求するためには、学習し、行動する人々の輪を早急に大きくする運動が必要なのではないでしょうか。

(二〇一〇年八月十五日記)



激動の時代を生きて

非常時の波の中で

可児義明(妙見坂)

昭和十一年、あの二・二六事件の年、私は東京日本橋の橋の袂室町で築地魚河岸の仲買人の子として産声を上げた。母の話では、私は夜泣きが酷く、母が毎晩のように銀座あたりをあやしなながら歩き回ったそうだ。

昭和十八年に東京駅と神田駅の間にある常盤国民学校に入學。すでに大東亜戦争の真つ只中で、連日ラジオから大本営発表で赫々たる戦果が伝えられ、子供心にもただならぬ気配を感じていた。校門前では毎朝「歩調とれ！」の掛け声のもと足を高く上げ手を大きく振って行進。節目節目での教育勅語の朗読、避難訓練。敵機襲来を告げる警戒警報や空襲警報とともに、授業の中途打ち切りも目を追うごとに増えていった。習った歌も「君が代」「日の丸の旗」「兵隊さんよ、有難う」など。遊びといえど東京駅や昭和通りなどでのトンボやバッタ捕り、日本橋下の川で干潮時にゴカイを捕つての魚釣り。百貨店の中でのかくれんぼ。宮城(きゆうじょう)前(皇居前広場)にも時には行ったが、大勢の軍人や警官が緊張した面持ちで往来して子供心にも遊びにくいものを感じた。

近隣では、焼夷弾を想定しての防火訓練、竹槍みたいなものを持つている人もいた。「スパイだ！」の声に追われて必死の形相で男が目の前を走り去った。物も急激に不足となり、配給された切符をもつての近くの料理屋での水っぽい雑炊。喫茶店(ミルクホール)などでは原料不足のため紅茶やコーヒーの出がらしを干し、リサイクルして使っていた。

百貨店など人出の多い場所には、千人針を求める婦人方が目立っていた。三越のシンボルのライオン像も、金属類回収令により、いつの間にか無くなった。

続く大空襲

昭和二十年肌寒い夜、空襲警報が発令され、私たちは隣組の家の地下室で息を殺していたが夜中過ぎに、誰かの「ここは危ないから外に逃げろ」の声で急いで外に出た。周りは火の海で道路の両側は高く燃え上がる火炎の壁、火の粉が吹雪のように降っていた。火傷を防ぐため防空頭巾などすっかり身を包んで、母と子どもたちが一塊になって三越百貨店の地下室に必死で避難。すでに多くの避難民が来ていた。早朝、警報解除となり外に出てみるとあたりの景色は一変、くすぶった煙が漂う焼け野が原だった。大勢の方が犠牲になったと聞かされた。

不幸中の幸いに我が家は焼失をまぬかれていた。父は江戸火消しよろしく一晚中我が家の屋上で防火活動をしていたという。関

東大震災を経験して災害に敏感になっていた父は「もうここはあぶない」と即断。急遽、伯母夫婦の住む今の調布市に身を寄せることになった。この伯母夫婦は一人息子が徴兵され、遺骨になって帰ってきた後、店を閉じてひっそり暮らしていた。

生き延びる

転居先は当時閑な田園地帯だったが、飛行場や陸軍部隊の大きな基地、近隣の山林や丘には軍用の壕があちこちあり、兵隊さんたちがキビキビ動き回っていた。東京空襲はその後も続き、毎夜のように東京上空が赤く染まっていた。日本橋の家が先日の空襲の次の空襲で焼失。父親が大事にしていた先祖伝来の武器なども煙となった。特に三月十日の東京大空襲は、B29爆撃機325機、38万発以上の焼夷弾が投下され、十万人以上が殺されたという。その後も数百機単位で何度も空襲があった。無差別爆撃を強硬に主張し実施したといわれる、あのルメイ少将の顔は忘れられない。核兵器使用禁止を強く訴え続けた、かのデルノア中佐の見識とは比較にならない。

新しい落ち着き先も平穏ではなかった。今度は焼夷弾ではなく爆弾による爆撃が続いた。当初は夜間爆撃が主体で、防空壕の中で連日、ピューピューという爆弾の落ちてくる音にまんじりともできなかった。時どき外に出て、近くの高射砲陣地からの迎撃を見ていた。探照燈に照らされた敵機が高射砲や時には友軍機の攻

撃を受けているがなかなか撃墜できず、いらいらした。飛行機が墜落してくるたびに、なぜか途中までは自分に向かって落ちてくる感じがした。子どもたちは、国のお役に立てばと飛行機や落下傘、銃砲弾などの大小の破片、アルミ製の電波欺瞞片などを集めたりもした。

爆撃は、軍事施設や道路・鉄道の破壊を目的にしているように感じられたが、命中率は低く、そのばらつきがかえって付近の民家を怖れさせた。

爆撃は次第に大胆になり、昼間にしかも低空飛行で機銃掃射も加わってきた。一番近かった爆弾の着弾は三十メートル程で、ちようど防空壕で昼食を取ろうしている矢先だ。大きな音と振動とともに壕の天井や壁の土が崩れ、せつかくの食卓も土煙の中、台無しとなった。

このような中で、ある日、機銃掃射しながら来た敵機に遭遇、母と私は道路の中央でなすすべもなく呆然と立ちすくんだ。そのとき飛行機はわれわれの前方で急上昇、こちらを見ている操縦士の姿もはつきり見えた。私は命が助かってほつとするよりも、アメリカにもこういう人がいるということに感動のようなものを覚えた。この頃には米軍の伝単（謀略ビラ）がしきりに空から撒かれるようになった。

八月になると広島、長崎で特殊爆弾が落とされ大勢の市民が殺

されたというニュースが伝わった。数十年は草木も生えず、人も住めないというわけだった。そしてその十五日、急に周りが静かになり、玉音放送で終戦を知った。この戦争で三百万人の日本人が犠牲になったといわれる。

戦後のいろいろ

終戦後最初に見た驚きは、進駐軍の上陸進軍だ。道に出たら撃ち殺されるといわれながら家の陰からこっそり見ると、上陸用舟艇、軍用トラック、ジープなど、それらが兵や銃・砲・戦車などを積んで道路を延々と進むさまは、圧倒的で今まで見た日本軍の兵装・兵器や車とまったく異なり、こんな国と戦争をして勝てるわけがなかったと、当時の国の判断の甘さを痛感した。

ひととき厳しい食糧難になった。雑草、どんぐり、蝗など毒でないものは何でも食べた。その中では農家は比較的余裕があったが、金を出しても米を分けてくれない。なけなしの着物など物々交換でやつとなにがしかの米を手できた。学校へも弁当を持ってゆくことができず、昼休みに急いで家に立ち返り、粗末ながら親の心のこもった昼食を済ませ学校に戻った。たまには弁当を持っていった時もあったが、ある日、農家の級友が白米ピカピカの弁当を差し出して、私の黒っぽい弁当を見ながら「初めて見るけどうまそうだから交換しよう」と言ってくれた。が、母の思いなど複雑な気持ちになり、応じることができなかった。

伯母の話では私のその頃はかなりやせ細っていて、青黒い顔で目だけが光っていたそうだ。学校の身体検査でも「栄養不良」と診断され、体中に吹き出物ができた。

遊びも弟や妹の子守をしながらとなり、家族への配給品を受け取って、担いで帰るのも、長男の私の担当だった。近所の子どもたちも同様だった。

時々行く新宿など都心部は、闇市でゴった返し、傷痍軍人や浮浪者、孤児が大勢たむろ。日本の若い男性の多くは戦争で死んだため、女性は結婚もままならず、家族を支えるために街娼「パンパン」や特定の進駐軍男性と付き合う「オンリー」になった人も少なくない。彼女たちは私たち子どもには優しい人が多かった。進駐軍の性病防止用スキンがなぜか子どもたちの間に広がり、風船にして遊んだとき、大人たちからたしなめられたりもした。

米兵にチューインガムやチョコレートをせがんだり、日曜学校でキャンディやケーキが配られたりしたが、私は物を得るために魂を売る思いがして、一度も参加しなかった。いつの間にか近隣に風（しらみ）が急激に広がり、DDTなどの殺虫剤漬けの日が続いた。

妹がMP（米軍憲兵）のジープに撥ねられ大怪我をして入院。MPは一回様子を見に来ただけだった。

学校の教科書は、政府や進駐軍に不都合なところを消す墨塗り

作業でほぼ真つ黒。「国民が苦しんだのは日本の軍閥のせい」、「民主主義、全体主義、個人主義、自由主義、利己主義……」と、講義をする側も聞く側も強いられている感じで、教育に大いなる矛盾と反感を抱いた。

極東国際軍事裁判（東京裁判）の様相をニュースなどで読み聞きしたり映画で見たりしたが、「勝てば官軍」の理がまかり通っている感じが強くして、情けなく淋しい思いがした。

中学の校舎は兵舎の再利用。先生も多くは軍隊帰り。ビンタ、ゲンコツ、足払い、雪上の正座など体罰は日常。それを受けることは男の勲章とも感じた。特に英語を必修科目にされたことには納得できなかった。近所には米軍基地に勤めている方も多く、生活の手段としての選択科目なら大いに賛成だが、言霊（ことだま）まで屈服することを強いられている感じがした。

銃弾から薬莢を外し、火薬を取り出してはストーブにくべて暖をとったりしたが、或る時誰かが知らせたのか先生が青くなつて飛んできた。時に非合理と思う仕置きを受けたときなど、しばしば近くの物を凶器に反撃しようとする、不思議に必ず親の背中が目の前に現れ、その手を阻止した。腫れた顔や鼻血を親に見せまいと、日が暮れるまで仲間たちと道草した。それでも戦時中に垣間見ていた軍人たちの体罰に比べれば、まだまだ優しいとも思った。最も感動したのは、クラス男女全員が私のバリケードに

なつて先生から守ってくれたときだ。級友はいつも私を守ってくれた。

下山事件、三鷹事件、松川事件など怪事件も相次いでおき、子どもの間ではCIAの仕業とうわさした。

第五福竜丸事件から

年を追うごとに国内は、復興への力強い動きが進んでいった。そのような中、昭和二十九年、またまた日本にとつても、我が家にとつても一大事件が勃発した。マグロ漁船第五福竜丸の被曝。南太平洋における米国の、広島原爆の一千倍強力といわれた水爆実験で、千隻以上の船舶が被曝したと伝えられる。そのうちの一隻が二十三人の乗組員を乗せた第五福竜丸で、もしSOSを発信したら米国に傍受され抹殺される恐れもありうると必死で焼津港に逃げ帰つたという。しかし母港でも放射能に対する恐れから、いろいろ差別的な扱いを受けたと伝聞する。久保山無線長も「原水爆の被害者は私を最後に……」の言葉を残し半年後死去。日米両国はなんとか問題が大きくなるまいよう苦慮した。

煮え切らない政府、男性たちに業を煮やし、女性たちが中心になつて立ち上がり、原水爆反対署名運動を起し、世界を動かして原水爆禁止世界大会の開催に導いたと聞いた。その熱意とパワーに敬意を惜しまない。

第五福竜丸事件は、マグロ専門の仲卸業の我が家としては致命

的な打撃であった。被曝マグロは行政からの命令で埋められたが、被曝していないマグロでもいっさい売れなくなった。マグロだけでなく他の魚も売れなくなった。東日本大震災の福島原発事故などでも野菜や魚介、牛肉類に起こったようにいわゆる風評被害である。鮮度が命のマグロがどんどん傷んでゆく。冷凍会社に預けると相当の費用がかかる。得意先の寿司店さんも客が来ないので仕入れもできないし、買掛金も払えない。ほとんど収入のない生活が半年ほど続いた。父親はもともと江戸っ子気質で、宵越しの金は持たないタイプなので蓄えも少なかった。両親と子ども七人、背水の陣となった。家族の中には進学を諦めなければならないものも出た。商売が元に戻るまでなお半年以上かかった。

かよっていた渋谷の高校の辺りは、ワシントンハイツを中心に米軍人やその家族の住まいが点在し、廃棄物として出される米国の通販カタログや書籍、それと進駐軍向けのラジオ放送(FEN)や洋画は、当時彼らを知る貴重な情報源だった。原宿から六本木辺りはいつの間にか外国語の看板が軒を並べていた。

このころ私は、米軍の中古のブルゾン、寝袋やポンチョ(雨具兼露営テント)などをアメ横で超格安で手に入れて山登りやスキーに使ったが、仲間たちの間ではそれらは朝鮮戦争で戦死した米兵のものだという。鉄砲水、落石流、滑落など幾度となく危険な目にあったが、そのつど山小屋の主人からも奇跡的といわれたほ

ど助かった。戦死した若い兵士の魂が彼の分も生きてくれ、と守ってくれた気がしてならない。

六〇年安保闘争で樺美智子さんがデモ中に亡くなった。彼女を助けることができなかったことが、今でも苛立たしいし、悔しい。

生きていくことの幸運

卒業後大阪の企業に就職。よき伴侶を見つけ昭和三十九年結婚。今の妙見坂に居を構えることになった。敗戦当時四歳の彼女は戦後、北朝鮮からの引揚者である。敗戦とともに家族ともども必死で逃げ戻ったが、そのときは今も決して忘れられないという。軍人たちは真っ先に日本に逃げ帰ったという。残された者たちは、夜陰に乗じての逃避行。途中から、髪を切って顔を汚した女性たちも加わって、声を立てたら捨てられるという恐怖感。着物の中に縫い付けていたお金まで全部巻き上げられた口惜しさ。帰還船の中、ぎゅう詰め船底で立ったまま大小便をせざるを得なかった悲しさ。そして家族全員が奇跡的に生きて日本に帰れた幸運など、何度も私に話をしてくれる。



連合艦隊最後の決算（比島沖最後の決戦）

黒田昭二（倉治）

昭和十九年十月、大本営は比島方面に「捷一号」作戦を発令、私が乗り組んでいた航空母艦「瑞鶴」を旗艦に、連合艦隊司令長官海軍中将小沢治三郎が座乗した我が機動艦隊は別府湾に集結、日本の運命を賭けた比島沖へ向けて出撃した。

決戦の日、十月二十五日未明敵戦闘機数百機が殺到。敵潜水艦の魚雷が瑞鶴の後部に命中。第二次攻撃隊さらに第三次攻撃隊がとどめを刺した飛来。我々は之に応戦。甲板は裂け、血の海となる。両舷に魚雷七発、甲板に爆弾四発命中し艦は左に大きく傾く。十四時、艦長貝塚武男大佐は「今は此れまで」と総員退去命令を発する。

この時、多くの仲間が暗黒の海に艦と共に没した。

私は、戦闘服のまま荒波に飛び込んだ。三百メートル程必死に泳ぎ艦から離れた。振り返ると巨艦は、艦首を真上にさらし乍ら金色に輝く太陽を浴び比島海溝深く没した。同時に私の頭は親兄弟妹の事が浮かび、涙が湧き出、この世の最後を感じたのである。取り敢えず、浮いていた木材につかまった。忽ちたくさんの戦友が海中で集まった。救助の駆逐艦に二度見逃され、そのまま通過

された。夜になると暗黒の海となる。其のときになって、やっと青い光の駆逐艦二隻（若月・初月）が救助にやってきたのである。左に行くか右に行くか迷うことなく近くの（若月）に救助されたが、その夜（初月）が敵に発見され、撃沈され、全員が再び帰る事はなかった。



おもなできごと

住井 麗子(妙見坂)

戦争とは、ある政治目的の為に、政治、経済、思想、軍事的な力を利用して行われる政治集団間の闘争である（世界大百科事典より）と言われていきます。世界の歴史上、大きな戦争として主に第一次・第二次世界大戦があげられると思います。第一次世界大戦はヨーロッパの国家間の戦争として始まり、ロシア、オーストリア、ドイツの三帝国の崩壊によって社会主義国ソ連の出現となりました。一九一九年パリ平和会議は米英仏伊日の五大国で議事が進められ東アジアの日本の発言力が強大になるという結果を招きました。第二次世界大戦はドイツのポーランド侵攻から一九四五年九月二日の日本降伏文書調印まで続いた戦争です。この戦争はドイツのナチズム、イタリヤのファシズム、日本の軍国主義が行った対外侵略とそれに対する抵抗の戦いで、戦争にヒト、モノのすべてが動員された全体戦争と言われています。さらに科学技術も動員され兵器開発が急速に進み核爆弾の開発となる。アメリカは戦争の早期終結の為、原爆を使用する決意をし、日本にポツダム宣言を送るが日本がこれに応じない為、原爆を投下しました。

これにより広島、長崎の悲劇が起きました。ソ連も参戦し、この事態から日本は降伏。終戦を迎えました。平和の礎に投稿された方々は、この時代を生き抜かれてきた背景を背負われて、その実話には第二次世界大戦の始まりから終わりまでの出来事が大きく影響されていると思います。二度と戦争のない平和な世界を願う核兵器の廃絶を叫びながら、この様な形の寄稿文を次世代に語り継ぐ資料の一部として掲載して下さることに感謝し、その時代の主な出来事を年代に追ってまとめてみました。

★一九三一年(昭和六年)

九月十八日 満州事変（日本の中国東北・内蒙古への武力侵略戦争）が起きる。日本関東軍は、中国東北部（満州）、満鉄線路（柳条湖付近）で爆薬を爆発させ、中国側の破壊工作として、中国の兵営である北大営と奉天城を占領、日本政府は不拡大方針をとったが、戦火は満州全土に拡がり満州事変となる。

このころから軍人が力を持ち始める。

★一九三二年(昭和七年)

一月二十三日 日・中両軍衝突、上海事変となる。

三月一日 満州国建国宣言

五月十五日 五・一五事件（海軍の将校らが犬養毅首相を暗殺する）

政党政治が終わり、軍人の力が、さらに、強まる。

★一九三三年（昭和八年）

日本が国際連盟を脱退する。

★一九三六年（昭和十一年）

二月二十六日 二・二六事件（陸軍の青年将校たちが高橋是清蔵相らを暗殺する）

軍部の反乱事件の始まり。軍部の横暴が強まる。

四月十八日 国号を大日本帝国とする。

★一九三七年（昭和十二年）

七月七日 日中戦争、日中事変始まる。（北京郊外、豊台に駐屯する日本歩兵隊が蘆溝橋付近で演習中、中国軍と、衝突、宣戦布告のないまま戦争となった）民主主義や自由主義の思想への弾圧が始まる。千人針、弾丸よけのお守りが送られ始める。（五銭、十銭を死線、苦戦を越えることの意味で縫いつけたり、寅年生まれの子性は、寅は日に千里を走って帰るとの意味で）兵士の生還を祈り自分の年齢だけ結び目を作る事が出来た）

★一九三八年（昭和十三年）

国家総動員法の制定で、日本国民総力戦体制が強まる。

人絹糸、配給となる。（切符制）

満蒙开拓青少年義勇軍訓練所開設

★一九三九年（昭和十四年）

五月十一日 ノモンハン事件（外蒙古軍と満州国軍衝突）援助するソ連軍と日本軍の戦闘となる。

七月 朝鮮人労働者の内地移住（日本政府は、朝鮮人労働者の内地移住に関して「民間事業所（自由募集）」の形で朝鮮人を駆り出すことを認めた）

九月 朝鮮人の強制連行、国民徴用令とする。

十二月 第二次世界大戦始まる（一九三九年～一九四五年）

★一九四〇年（昭和十五年）

日独伊三国同盟結ばれる

★一九四一年（昭和十六年）

三月一日 国民学校令を公布（小学校が国民学校と名前が変わる）
十月十八日 東条英機陸軍相を中心に新内閣成立。「対米戦争」の道を進む。

十二月八日 日本の海軍がハワイの真珠湾を攻撃する。
太平洋戦争始まる。

★一九四二年（昭和十七年）

日本国土がはじめてアメリカ軍機によって空襲される。
日本連合艦隊がミッドウェー海戦で大敗する。

もの不足のため配給制度が強められる。

★一九四三年（昭和十八年）

アメリカのワシントン州ハンフォード工場（後に長崎に投下され

た原爆のプラトニウムを製造) 建設が始まる。

四月十八日 山本五十六連合艦隊司令長官大将戦死

日本軍、アッツ島で玉砕

九月三日 伊、連合軍に無条件降伏

十一月六日 大東亜会議(インド、タイ、ビルマ、フィリピン、

満州、中華民国、日本) 七ヶ国

ガダルカナル島から日本軍撤退を始める。

中学生以上の学生や女学生が武器をつくる工場などで働かされる。

大学生も学業の途中で戦地に行く様になる。(学徒出陣)

★一九四四年(昭和十九年)

六月四日 連合軍、ローマ占領

七月七日 サイパンで日本軍全滅

八月二十二日 沖縄から九州へ向かう学童疎開船(対馬丸)、米海

軍潜水艦ボーフィン号の魚雷受け、沈められる。

十月二十日 海軍中央首脳会議で、敵に有効な打撃を加えられぬ

打開策として、第一戦将校の殉国精神と犠牲的(至誠に訴えた。(必

殺、必死の体当たりを敢行する他ないと提起する) 出撃する神風

特別攻撃隊(十代後半〜二十代前半)に「神として体当たり神に

なれ」と、訓示する。

十月二十四日 レイテ沖海戦、日本連合艦隊壊滅

十月二十五日 神風特別攻撃隊出撃

大都市では国民学校の子供達の集団疎開が始まる。

サイパン島の日本軍が全滅する。

★一九四五年(昭和二十年)

二月十九日 米軍、硫黄島上陸

三月六日 国民勤労動員令公布される

三月十日 東京大空襲(B二九―三二五機が東京を襲撃焼け野原

となる)

三月十四日 大阪空襲第一回(B二九―二七四機)

三月十七日 神戸空襲(B二九―三〇九機)

四月一日 米軍沖縄上陸

四月七日 戦艦大和、撃沈される

五月七日 ドイツ無条件降伏

六月二十三日 沖縄空襲

七月十六日 ニューメキシコ州アラモゴードで、初のプラトニウ

ムを使った原子爆弾実験が成功

七月二十二日 米の原爆投下の目標選定委員会が、広島、小倉、

新潟、長崎を目標都市に選ぶ

七月二十四日 ポツダムで米のトルーマン大統領がソ連のスター

リン首相に、新型爆弾の開発成功と日本への使用を伝える。

七月二十五日 米では参謀本部から空軍司令官に、八月一日以降、

原爆を広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに目視投下するよう命

令。

七月二十六日 米、英、中連名「ポツダム宣言」発表

八月一日 米、広島に投下するウラン型原子爆弾「リトルボーイ」の組み立て完了。攻撃部隊は七機編成。B二九爆撃機三機が先行して広島・小倉・長崎の上空で待機、気象状況を原爆投下機エノラ・ゲイのチベッツ機長とグアム、テニアンとの両司令部に報告。二機はエノラ・ゲイを援護、うち一機は爆発測定器、もう一機はカメラを搭載。残る一機はエノラ・ゲイの代替機として硫黄島で待機。

八月六日 アメリカ、原子爆弾（ウラニウム爆弾）リトルボーイを広島へ投下。（日本時間八月六日午前〇時三十七分、気象観測機三機がテニアン基地を離陸。午前一時四十五分、原爆を積んだエノラ・ゲイ発進。午前八時十五分、広島に投下。作戦を終え基地に帰ったのは午後一時五十八分だった。

八月八日 ソ連、対日宣戦布告

八月九日 アメリカ、原子爆弾（プルトニウム爆弾）ファットマンを長崎へ投下

八月十四日 御前会議、ポツダム宣言受諾を決定

八月十五日 日本無条件降伏発表。戦争終結、敗戦

八月三十日 連合国最高司令官マッカーサー、連合国軍総司令部（GHQ）を設置する

九月一日 新学期始まる

九月二日 東京湾（ミズーリ）艦上で降伏文書調印

九月十一日 GHQが東条英機など、三十九人の逮捕命令をだす

九月二十七日 天皇がマッカーサー訪問する（第一回目会見）

十月四日 GHQが政治、民事、宗教の自由に対する制限撤廃の覚書、だす

十月十一日 マッカーサー、人権確保の五大改革指令する

十月二十四日 国際連合が成立する

★一九四六年（昭和二十一年）

一月一日 天皇、人間宣言する

一月二十三日 広島原爆孤児收容の戦災孤児育成所が開所

二月三日 マッカーサー、GHQ民生局に日本憲法草案作成

二月二十五日 新円切り換え開始

五月一日 戦後初のメーデー

五月三日 極東国際軍事裁判開廷

五月三十一日 天皇、マッカーサー会見（二回目）

七月一日 アメリカ、ビキニ環礁で、戦後初めて第一回核実験

八月五日 広島、平和復興市民大会（町内会連盟）開かれる

十月十六日 天皇、マッカーサー会見（三回目）

十一月三日 日本国憲法公布

十二月八日 シベリア引き揚げ、第一船、舞鶴入港

明日への一言

千本 忠一（私市）

★ 物心がついたのは三重県の山村。

周囲は一面緑に囲まれ人々の家々が点在する。

日頃は穏やかな清流が流れる谷や川。

正月や秋祭りの日に、多くの人々が集まり、日頃はひたすら黙々と働き続ける村の人々にぎわった。

そんな祭りの中、今も鮮明に記憶に残る光景。白衣を着て、帽子をかぶりアコーデオンを唱でる人の姿。

同じ白衣の片腕のない人、片足のない人、杖に支えられながら、募金箱を持つ人々の姿。

傷痍軍人の姿は今も脳裏に焼き付いて離れない。

新しい日本国憲法がすでに制定施行されていたことは知る由もない。

★ 昭和二十四年四月、桜満開の小学校に入学。

この頃、村に公民館が建てられ、久しぶりに人々にぎわったことを思い出す。

公民館の建設は、村の人々が建材を持ち寄り皆が力を合わせて建

てられた。

その頃、母（明治三十三年生まれ）、兄（昭和六年生まれ）姉（昭和十年生まれ）、の四人は、皮屋根の家に住んでいた。

家に電燈はなく、水は湧き水を汲み、ガスも風呂もない生活。

私達の住み家も村の人々に建てて頂いた。家はときおりバスやトラックが走る道路から離れた川向かいにあり、橋は川面から数メートル上の丸木橋。この橋も村の人々にかけて頂いた。

大水が出ると橋は流され、家に帰れなくなったことは何度もある。

その度に川向かいの道路にかけられた別の大橋を渡り、ずっと遠回りして学校と家を行き来する生活だった。

★ 昭和二十五年の秋、三重県の山村も大風水害に見舞われた。

夜が明けて風雨がおさまり、眼にしたのは川から十数メートル上に建てられた家から見える川の流れ。子供ながら一瞬何が起こったのか自分の眼を疑う。

それまで、季節ごとに山の幸、川の幸を手にしては喜び勇んで自然の恵みを家に持ち帰ったことが思い出される。

昭和二十六年か二十七年、兄、次いで姉が、大阪へ。それまで疎開していたこと、都会に人々が戻ることが制限されていたことは後になって知った。

★ 昭和二十八年の秋、母と私も大阪市内に戻るようになった。

その第一印象は、自然の中で十年近く育ってきた者にとって経験

したことはない、人々のあふれる街の姿。

大阪では古い中二階の六軒長屋の狭い家に、四家族十人が住むことになった。

三重県の山村とは異なり一日中、バスやトラックが走っている。所によつては路面電車も。ところが、道路は至るところ、でこぼこだらけ。

家は国道二六号線の近くで、進駐軍の大きなトレーラーが往来していた。子供達は、トレーラーに人の姿をみると、手を振って笑顔で見送った。杉本町や堺南部の浜寺には進駐軍が駐留していた。浜寺は海水浴場で、駐留軍のゲートをくぐつて多くの人々が出入りしていたが、友好的雰囲気であつたことが記憶に残る。

★ 家の周辺は、一面ガレキの山、山、山。

整地されたところでは、カボチャや、さつまいも等が、つくられていた。小学校五年で転入して驚いたのは、生徒数の違い。クラス五十人以上。私達の世代は今でいう母子家庭が多かつた。それが何を語っているか意識することはなかつた。今にして当時の「未亡人」という言葉を思い出す。

その頃も大阪市内では鉄道の両側に、一面、バラック建ての掘っ立て小屋が、所狭しと建ち並び、多くの人がそこを日々の生活の場に使っていた。

家から東の方を見つめると、冬の生駒山頂が雪におおわれ、西の

海岸方面は煙突が林立し、もくもくと煙を吐き出して復興のシンボルになろうとしていた。

★ 昭和二十四年四月、桜の花が咲き乱れる小学校の入学のときを振り返ると、名札には、「いない ただかず」と記されていた。

中学生になつてから今の氏名になつた。

あれから六十年が過ぎ、そのうちに七十年を迎える。

新しい憲法、とりわけ日本国憲法第九条は、平和の礎として人々を守り続けてきた。これからは、私達を守り続けるべき国民の宝であることを思う、今日この頃である。

憲法第9条

戦争の放棄、戦力及び交戦権の否認

日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。

国の交戦権は、これを認めない。

支援と終戦前後の障がい者

橘 順一（松塚）

私事ですが、生後八ヶ月で「小児麻痺」に罹り、以来歩行不自由となり（走ったり出来ない）ました。この十五年間は、車椅子常用品者となっております。

国民学校（現在の小学校）二年生で、大東亜戦争が始まり、大阪市内に住んでいた同級生らは、次々と、集団や縁故疎開で、田舎にいきました。

私は、自宅近くの空き地に材木を組み立てた上に、土を盛っただけの「防空壕」の中で、付近に落とされる爆弾や、焼夷弾の音に、震えていました。豆カス等を食べて過ごしましたが、食糧は、配給制で何時も空腹でした。

考えてみれば、国民学校には、半分の三年余りしか通学していません。

一九四五年八月十四日午後、最後となった大阪大爆撃があり、多数の死傷者が出て、大阪城周辺は、焼け野が原となったのです。それまで晴れ渡っていた夏空が、次第に真つ暗になり雨まで降り出したのです。子供心にも「オカシイナ、変なことでも起こるの

かな」との予感がしたのです。

そしたら翌日に終戦の玉音放送がなされたのです。

戦後の食糧難もひどいものでした。父は、母の晴着を持って、お米や大根との物々交換に行きましたが、帰途で違法行為として警察に取り上げられることもしばしばありました。「支援」など言えるはずもなく、みんな自分が「食べて・生きる」ことで必死でした。

今回の三・一一（東日本大震災）の直後からのテレビ放送を見た時もあの折と同じ思いを味わいました。

これで日本は、大きく変わるなど、直感したのです。

今、話題の優勝凱旋したサッカー「なでしこジャパン」の澤主将は「夢はみるだけじゃなく、成し遂げるものだ」と語っていました。

又、NHKの大河ドラマ「江・三姉妹」の千利休は「みなが笑って暮らせる世の中が欲しいのう」と。

平和な世の中でこそ、安心・安全で生命が尊ばれることを信じて、障がい者の自立と平等、親睦と交流のために、より一層の“あゆみ”を進めたいと、願っています。

二〇一一年十二月

「あつ！グラマン戦闘機が」

土井正臣（星田山手）

子ども心に焼きついたこと

昭和十六年、太平洋戦争が始まった時、私は四歳。そして昭和二十年終戦の年、私は国民学校二年生八歳でした。ですから戦争を覚えている最後の年代といえます。

当時私は京都の伏見に住んでいました。京都女子師範付属幼稚園に入って、最初に習ったお歌が「ぼくは軍人大好きよ いまに大きくなったなら 勲章つけて 剣さげて お馬にのつてはいどうどう」という歌でした。幼稚園の行き帰り、兵隊さんに出会うと必ず敬礼をします。すると兵隊さんも笑顔で敬礼を返してくれるのが嬉しかったことを思い出します。

練兵場では、厳しい訓練をしているのを見ました。木で作った模型戦車に向かって突撃し、戦車に跳び乗り銃剣で突いたり、棒の先に仕掛けた爆弾を戦車のキャタピラに差し込むために突撃したり、野原に仰向けになり、三八銃で模型飛行機を撃つ訓練などです。ただ子供心にも、あれでは兵隊さん自身が危険で、死んでしまうじゃないかと心配になったり、あの銃で飛行機まで弾が届くのだろうか、鋭い目で見てもいました。

京都は戦災を免れた都市だと一般に思われています。たしかに、

他の大都市に比べればそうなのですが、近くの久保には、国際航空工業の飛行場が在りましたから、そうした軍需工場は狙われました。私の父は、その工場の設計技師として働いていましたから、空襲の話はよく聞きました。ある時は、防空壕が直撃を受け、学徒動員の女子学生が沢山亡くなったということです。

それに京都の上空は、名古屋へ向かう敵機の通過点になりましたから、頭上の空いっぱい何十機というB29爆撃機が編隊を組んで爆音を轟かせながら通過していくのです。不気味でした。ラジオからは、「京都府、滋賀県、空襲警報発令！」と知らせるのですが、その時はもう真上を通り過ぎていくのです。近くの軍の駐屯地には、高射砲が備え付けられていましたが、それは木で作られている模造で、火を噴くことはありませんでした。子供心にも悔しく思うとともに、敗色が濃いことを感じざるを得ませんでした。

間一髪で助かる

そんな、終戦間近い、初夏のある日、私は生涯忘れることのできない怖い体験をするのです。それは、学校の帰り道、防空頭巾をかぶり、集団下校の最後の友達と別れ、ひとり歩いて、家までもうすぐというところで、突然、飛行機の爆音が、背後に迫ってくるのを感じたので、振り向くと、敵のグラマン戦闘機が、急降下して、こちらに向かって飛来してきたのです。ゴーグルをつけ

た飛行士の目が私を睨んでいました。一瞬、黒い悪魔のように見えしました。怖いと感じたので、とつさに本能的に、近くの家の石垣にへばりつきました。バリバリバリッと機関銃の音、すぐ横の地面に、パツパツパツと砂煙が走りしました。機銃掃射です。しばらくは、すくんで動けませんでした。(いま思い返しても、よくぞ逃げて助かったと思います。)

急いで帰る途中、あちこちで、火の手があがっていました。我が家の二階の窓からも、煙が出ていて、隣組の人達がバケツリレーで、懸命に消火にあたってくれていたのです。

惨劇そして食糧難

この頃、大阪は大変でした。軍の砲兵工廠がありましたから、五十回を超える空襲によって焼け野原になり、京都駅周辺には、大阪から逃れて来た人達が、すすで真つ黒の顔、焼け焦げた服のまま、行き場も無く、大勢座り込んでいました。戦災で両親を亡くした子供達、つまり戦災孤児も沢山出ました。

私達京都の小学校には、そうした戦災孤児が送り込まれ、ひとクラスに四、五人が配属されました。毛布で作った同じ服を着せられていましたから、すぐにそれとわかります。

大阪旭区の城北公園でも、惨劇があつたのです。空襲の火の手を逃れて非難してきた人々に向けて、繰り返し機銃掃射が行われたのです。千数百人の方々がなくなりました。その慰霊碑が「千

人塚」として土手の上であり、毎年七月に慰霊祭が行われていました。

私の母校、府立北野高校の赤レンガにも機銃の痕が無残にも残っています。

戦時中の、もうひとつの辛い思い出は、食糧難です。食べ盛りの幼少時に、食べ物が無く、何時もお腹を空かしていました。当時、食料は配給制で「米穀通帳」で受けるのですが、遅配、欠配が続きました。芋ご飯があれば幸いです。豆かす、芋かす、海藻類、薄い雑炊、それさえも無い日が続きました。

母は、箆笥から着物を出して、農家へ買出しに行きました。私はそのお供です。食べ盛りの四人の子どもをかかえて少しでも多くの食べ物と交換してもらおうと交渉する母の姿を見ていました。

戦後の混乱の中で

さて、敗戦となり、社会の価値観ががらりと変わり、子供心にも困惑と、疑問を抱きました。新しい教科書はなく、先輩のお古の教科書の軍国主義に関する部分に墨を塗らされて、消していました。

いつも行く銭湯の番台のおばさんは、戦死した二人の息子のことを嘆いて気違いのように泣き叫んでいました。我が家でも、叔父さんが二人戦死しています。一人は南方で戦死、もう一人は「U

ボートの遺書」としてNHKでも放映されましたが、日本へ向かう途中、ドイツが降伏したため、ドイツの潜水艦の中で機密を守るため、自決せざるを得なかった技術将校の叔父さんがいます（庄司元三大佐）。

戦中戦後、食べ物が手に入ると聞けば、どんなに遠くても出かけました。ある時、淀へ行けば、大根を食べさせてくれる店があると聞き、電車に乗って家族で出かけたこともありました。学校からは先生に連れられていなご捕りに行きました。フライパンで炒めて食べるのです。少しでも空き地があれば、畑が作られ薩摩芋やかぼちやを植えました。

戦後、占領軍がやって来るといので、皆怖れ不安を抱いていました。しかし、実際にやって来た米兵は、二十歳前後の気さくな若い兵士でした。子供たちは「ハロー」「サンキュー」という言葉をすぐに覚えて兵士に、ガムやチョコレートをねだるようになりました。ジープに乗せてくれたこともあります。

夜になると、街角にパンパンと呼ばれる女性が出没するようになります。オンリーと呼ばれる将校相手の現地妻も現れました。かつての敵国の兵士に媚びるとは恥知らずだと非難する人もいました。彼女たちのお陰で、一般の婦女子の安全が守られていたという現実もありました。子供心にも、複雑な思いで眺めたものでした。

終戦間際、電車で神戸を通った時のこと、車窓から見た光景、捕虜の白人米兵が上半身裸で労働させられていましたが、空襲警報がなり、飛来した上空の米軍機に向かってその捕虜が大きく手を振っていたのが印象にあります。

戦後の闇市（京都京極）で揚げパンを買ってもらって食べた時、それは美味しかった。（十円）

同じく京都三条大橋のたもとで芋飴を売っていたのを見つけ、跳んで家に帰り、三円お金をもらって買いに行ったら、もう売り切れていました。

— 知りたくば 訪ね来てみよ森之宮 ピース大阪戦争資料館

— 空中戦 ありし交野の 終戦日—

— 戦没者 三百万人 終戦日—

— 敗戦日 比べりや何ぞ この不況—



太平洋戦争体験記

増田厚三(私部南)

先般、沖縄戦六十六周年記念式典のテレビを視聴した。米軍より攻撃を受けた砲弾は国土二十センチメートルに一発撃ち込まれたと聞く。無差別殺人の非人間性が「東洋永遠の平和の為」と言う。大義名分の下に国家間で行われた戦争の事実は拭いきれない日本歴史の汚点であった。定年を終えて片時も忘れることのない悲劇の源流、広島「大竹」を訪れることにした。

「大竹」は広島より山陽線山口寄りにある。日本で唯一の海軍潜水学校があり、将校から兵隊に至るまでの潜水艦乗組員を養成するところであった。正確と勇氣は得目の一つとなつて訓練の中に織り込まれていた。私は十六歳でその学校に入った。

駅より海岸に向かって松林を通り抜ける所に学校はあったが、今は石油化学工場となり、当時の面影は見られない。海岸伝いに堤防を歩くと水面に浮かぶコンクリートで建てられた二畳ほどの検問所が見えた。当時を知る唯一の生き証人である。静かに波を受け船の発着もなく忘れられた過去の遺物を眺めながら、堤防に腰を下ろし当時をしのぶ。津波のように押し寄せる六十五年前の回想：同じ班で苦渋を共にした同期の顔。新兵時代、教員から

「貴様の命は一銭五厘の葉書の価値しかない。」と言われたあの頃。国のために捧げた命は葉書一枚の価値にしかないのかと考えたが、洗脳は極限の訓練によりいつしか肯定の枠にいれられてしまう。

広島は夏は暑い。特にこの地は埋め立てられたばかりの砂地でどこを歩いても暑い砂が五センチメートル程足を埋める。この砂地で銃を持ち、行進突撃訓練と暇を与えてくれない。この大地がスライドの一コマ一コマとなつて投影される。この海で短艇に乗り「漕ぎ方用意」イーチ(トン)、イーチ(トン)と、班長が甲板を棒でたたき。三メートルもあろうか重いオールは潮流と合わない。手に肉刺ができる。皮が剥げる。血が出るが止めるわけにはいかない。漕ぎ続けなければならない。肉刺の上にまた肉刺ができる。痛そうにすると棒が頭の上に飛んでくる。瘡ができる。その上にまた瘡ができる。尻の皮は擦り傷となるが、中止する事はできない。血がズボンの上まで浸み込む。それでも漕ぐ。宮島一周、涙の短艇だ。悲惨だったが涙は出ない。

練習生になり、この海に係留されている潜水艦に乗り、瀬戸内海に出る。潜航、浮上を繰り返す。船酔いをする。食べたものが内蔵から出そうになる。吐き出せば呑みこまされる。我慢の限界を超えるとき初めて元の状態に戻るようだ。教官曰く「自分で食べたものは責任を持って自分で納め、吐いて出すくらいなら食べ

るな」と。そして「…夕食抜き」と宣告される。

遺書について

練習生も終わり頃、分隊デッキに総員集合がかかる。今から配属希望を書け。一、第一線潜水艦 二、艦隊潜水艦 三、練習艦
この中より選べ…と小さい声で教員助手が一を希望せよと言う。三を書いた者は軍人精神の欠如だと言つて棒で殴られる。…これは誰言うことなく申し継がれた言葉である。

私の班に由利と言う福岡出身の男が第一希望に、人間魚雷と書いた。人間魚雷とは、今まで誰も知らなかった筈だが、いつの間にか、潜水学校の一端にテントで仕切られた一角が出来、そこに二十名ばかりの予科練出身の下士官が配属され、訓練を受けていたの思い出す。秘密だったが由利君はうすうす知っていたのかもしれない。彼は分隊百七十名中一番の成績で巣立っていった。その後のことは分からないが人間魚雷回天の基地では見ることはなかった。佐世保に行き、南方の潜水艦基地に転属したのかも知れないが、結局は会うこともなく消息も分からなかった。

十六歳八ヶ月になった。配属希望を提出した後、「遺書を書け」と言う指示を受けた。この世に生を受けまだ何も知らない少年が思い残すことなどない筈なのに、書けと言われれば書かなくてはならない。同じ班の年配者に聞いてみると、「この世に生きてきた証だよ。髪の毛とか爪とか…国の為に奉公するから心配しない

よう誇りを持って生きるように…」等と教えてくれた。「昨日髪を刈ったばかりだよ」と言う。「脛の毛を二、三本抜いて爪と一緒に包めばいい」等と教えてくれた。それに従い、封筒に入れ、表に兵籍番号と名前を書いて封をした。身軽くなった感じがし、すっきりしたが、死については、実感が湧かない。

大竹には海兵団があつた。海岸には年老いた戦艦が廃艦として錨を下していた。新兵教育中、戦艦見学に引率され、船尾より前甲板まで三十分で出てくるように、艦内に入り各区画を見学せよ…と言われた。あまりの広さにどこをどう通つたのか分からない。ある区画に腰掛け式の緑台のようなものがあり、ほぼ一メートル毎に二十五センチメートル程度の円形の穴があげられ二十個程の列が仕切りなしに二列並んでいた。初めて見る洋式トイレである。迷いながらもやつと制限時間内に上甲板に出られほつとした。

八ヶ月間、同じ所で同じ時間を同じように生活した仲間との絆は、断ち切ることが出来ない分身である。軍隊は常に死を基本原則にしている。別れは宿命であるが、悲しみを超えて靖国で逢おうと言う。これは無言の中での死の世界を表現している。涙をこらえた精一杯の言葉は「貴様と俺とはどちらかが先に散ると思う。年の順ではない。みな同じだ。」仲の良い練習生、藪内二十一歳和歌山出身、大石十九歳秋田、増田十六歳愛媛、この三名は何時にも集まり話し合う。三人とも靖国神社に行ったことがない。だが、

死ねば神様になれる。神様とはどんなものか皆知らないが、知ろうともしない。「先に死んだ者が場所を取ろう。神社の鳥居に向かって右側の桜だ。」と言うと、「門をくぐって一番最初の桜だ。桜の一番上の小枝に上から藪内、大石、増田と三人一緒に、隣同士で咲くんだ。」「最初に死んだ者は席取り忘れるなよ。」固い約束をして別れる。二、三日経って佐世保基地、横須賀、呉とそれぞれの基地へ：敬礼の中、退校。船に乗る。帽振れ。そして別れた。：二度と三人で会うことはなかった。

この海は、昔と変わらない小浜だが、全く新しい波である。無限の命を呑み込んだ海：今となつては惜しみすら感じさせない程の穏やかな海である。

特潜基地にて

安芸灘と呉の港を一望に眺める音戸大橋を渡り、清盛塚を左に見て、音戸町を通り抜け、海岸に沿ってしばらく行くとやがて道は右折して波多見の集落に入る。道の右側に大きな素木の鳥居があり、これをくぐると五メートル巾の立派な石段があり、十数段上りかけた左側に四平方メートルの敷地があり、二・八メートル程の特潜碑が海に向かって建てられている。はるか前方に見える、大浦崎から情島、小情島そして大迫から、亀が首へと海原が開ける。碑に礼拝し頂上の八幡山神社へと登り、瀬戸に広がる海原を眺めながら、昭和二十年三月頃を回想する。ハワイ真珠湾攻撃に

出陣した特殊潜航艇甲標的は、この地から搭載艦千代田に乗せられ初戦を飾った：と。標的（特潜）二人乗りを思い出す。全長二十五メートル、最大幅一、八八メートル、魚雷二本、爆薬千五百キログラム。この第一特別基地には数日派遣されたことがある。空襲で兵舎は半壊、後片付けであったが、場所は今の水産試験場である。

大迫は第一特別基地隊であり、主に特殊潜航艇蛟龍（五人乗り）の養成所であった。課業が終わりほっと一息していると、教員が呼んでいると言う。駆けつけると、教員は「貴様あれを見よ。あれが俺の艇だ。俺と一緒に死んでくれるか。」と言う。突然の事で、考える暇もなく「はい。」と言う返事しかできなかった。教員は水雷学校高等科出身の上等兵曹で私の小学校の先輩にあたる同郷の人だった。

講習も終わろうとしていた折、予備学生出身の少尉が五十名程赴任してきた。第四期予備少尉である。三ヶ月の講習を受け、艇長として各突撃隊に配属される人であり、この人々を教えるのも教員である。戦争が一ヶ月長ければ自分もまた、この少尉達と同様海神として太平洋を泳いでいたであろう：

基地には山桜が咲き緑の中の白は自然と調和する。美しいが美を鑑賞する心のゆとりもなかった。課業整列後、陸揚げされた艇に行く途中、伝令が大声で「基地隊員、総員見送りの位置に整列。」

「搭乗員別杯」と：

基地隊員は人垣で二メートルほどの通路を作り両脇に棧橋まで二〇〇メートルほどを並列に並ぶ。その真中を見送られて離別する搭乗員である。誰も何も言わない。真心のこもった敬礼のみである。見送られる将校は、左腰に軍刀を下げ鉢巻を締め、答礼しながら、前方を見つめたまま事務的に進んでゆく。蒼白の顔。二度と踏むことのない、死への道。一步一步かみしめて前進する。徳山沖で待機しているイ号潜水艦に乗せられ艦内に。そこでは誰いともなくよばれている、「神様の区画」に案内され、出撃命令を待つ。会敵の場合は魚雷で済む。難しい場合は、「回天戦用意」が伝声管より伝えられる。

回天は魚雷の中央部に一メートル四方の司令塔を作り特眼鏡を見ながら目的艦に近づき体当たりする兵器である。一度潜水艦を離れたら帰ることができない。人間一人一メートル区画の鉄の部屋で外部との交渉も断たれ孤独の中で体当たりしなければならぬ。搭乗員にはウイスキー・青酸カリが渡されていた…とか。当時の風潮としては、散るのは美徳であるかの如く宣伝されていた。私の場合、搭乗経験はないが、死への恐怖から脱却することはできなかった。

戦争と言う宿命の時代の中で、国家権力維持のため、傀儡として散華した、わだつみの先輩諸兄。

…安らかに眠られんことを祈念。

まとめ

人の命は地球より重い今の時代に考えられない戦争の時代であった。国のために命を捨てるのが正義であろうか。死ぬことによつて国を守る法則があるのだろうか。六十六年前、人間の生命は一銭五厘の葉書と同じに扱われてきた。

遺書を書いて死に赴く悲惨さ。あの潜水艇で上官と一緒に死のうと言われた時も、すべてが戦争と言う国家ぐるみの殺人行為であり、参加しないものは非国民と格付けされ、軍国の潮の中に流された時代であった。

二度と再び繰り返してはならない戦争。その悲惨さをもう一度確認し、恒久の平和に向かって歩んでいきたい。



『祖国の土は踏んだが』

水上隆邦(私市)

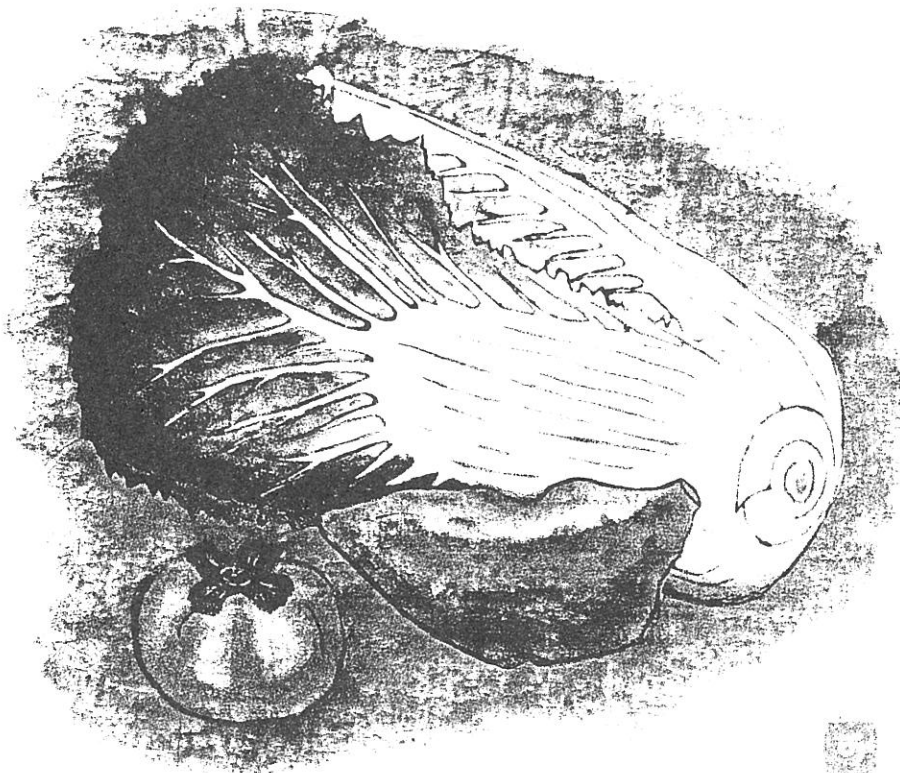
生きて祖国の土を踏むまではの一念で、着の身着のまま帰国の船に乗り込んだ。昭和二十一年十月の中旬に長崎県の佐世保港に着いた。緑豊かな景色を目にして「やっと帰って来た！」と喜びの一言であった。さて明日は上陸かと期待していたら、船内で赤痢の患者が出たと言う事で、上陸どころか港外に待避させられ、四日後に再び港内に入り、待望の上陸が開始された。

身内の人々の出迎えを得て帰郷する人や、肉親や姻戚のある人はそれぞれの地に向った。帰郷の出来ない人、特に沖縄出身の人たちは占領下にあたって、帰るにも帰られない人たちであった。また渡満するにあたって、土地、家屋や不動産全てを手放している人たちも帰る所が無い人々である。これらの人たちは引揚げ援護局の世話を受けて、仮住居に身を置くことになった。しかし、住食が保障された生活も六カ月ともなると、その生活には満足出来なくなり、定住する場所を得て自活することを望むようになった。再び援護局の紹介で、福岡県糸島郡芥屋村と言う糸島半島の突端に近い所に入植した。海と斜面の雑木林に覆われた僻地で、家を建てるにも難儀の場所であった。まず住居の建設から始まり定住

する一步を踏み出した。

開拓した範囲はそれぞれ個人の所有になるとの約束であったので、入植者は真剣に開墾に励んだ。だが雑木林の為開墾が遅々として進まず、畑を創り作物が取れるまでには最低三年は掛るであらうと思われた。さて、そうなれば如何にして日々の糧を得るのかが問題であった。当時は現在のように日雇いや出稼ぎで日銭を稼ぐという手法は無く、農家や漁師さんたちに頭を下げ、引揚げ時に支給された手当てを削りながら食をつないでいた。でもこんな生活は長く続く訳はない。それではどうするか？ まず思いついたのは塩作りである。だがこの時代の塩は統製品で自由販売は出来なかったし、作る事さえ当局の目を掠めながらの作業であった。万が一発見されたら「入植者全員の命の糧だ。」と逃れていた。海水は眼の前に有り、汲み取りは楽で三日三晩の煮込みで、真つ白な塩が出来上がった。ただ途中で火を消すことがあると、今までの努力が一瞬にして水の泡となってしまうので、交替の寝ずの番で燃やし続けた。それ故完成品を見ると皆で喜んだものである。この塩を農家に持って行くと農家も塩不足で、喜んで食糧と交換してくれた。これは漁師さんも同じで魚介と交換してもらった。これで日々の食糧は事欠かなかったが、最も必要なのは現金である。現金を手にするにはどうすればいいのか？ そこで考えられたのが闇市で現金化することである。闇市でも統製品は高

いりこやちりめんじゃこ等も統製品であったので、漁村で塩と交換し、警察の目を避けながら袋詰めにしてリュックに入れて行った。運ぶ先は博多の天神である。今は福岡市内の一大繁華街になっっているが、戦後は一大闇市市場であった。ただ巡査の目があるので、真つすぐ天神に行くのは危険なので二つ手前の駅で下車し、路地を選んで目的地に行った。幸い一度も巡査に捕らまわったことはなかったが、精神的には非常に疲れる仕事であった。もう一つ困難な事があった。それは、汽車に乗るまでの順番待ちである。客車一両に貨車二両の筑肥線であったが、乗車するまで何回待たされたことか。番号を貰って待っても、前駅までに満車になっていくことが多く、無理して乗り込むと売り物の商品が壊れて売り物にならないから、辛抱して空いた汽車に乗る事になっていた。やつと闇市に着いて売買が成立すると思わずニンマリしたものである。ともあれこのような生活が引き揚げ後の一環で、なんとか生きる事が許された一駒である。



語りつぐ大東亜戦争

森本博秋(神宮寺)

外地、本土での空襲状況、火災状況、悲惨な戦死負傷者等、テレビ、ラジオ、新聞などで報道され、よく国民の知る所です。私は知られない戦争の裏話を経験者として申し上げます。民間人が徴用され軍属として、一般商船は御用船として徴用され輸送業務に当たる。如何に軍属が負傷戦死したか輸送船何万トンと言う巨大な船が空爆、魚雷などで被害を受け海底深く沈み藻屑となる。我々の船友も多く海底にて眠って未だ親兄弟の手元に帰っておらず残念です。悔しい思いがします。狭い輸送船の中で恐怖を抱きながら任務を遂行する軍属をご紹介します。

私はチエリボン丸、四千トン級の南方航路(インドネシア方面行き)の乗組員でした。内地に帰り横浜港停泊中、商船乗組員と共に軍部に徴用され広島陸軍宇品輸送司令部へ集結せよとの命令を受け広島宇品港へ回航。宇品港にて船内改装(人馬を収容出来るよう)し、四国坂出港へ回航し丸亀の善通寺師団の兵隊、軍馬、弾薬、大砲、食糧など本船に積み坂出港出港。明石海峡、紀伊水道を通過、太平洋に出ると前方に巡洋艦、右舷と左舷に駆逐艦各一隻が護衛。日本列島に沿って北へ進路をとる。このような

大掛りな軍事演習した事はないと兵隊さんは言う。知らぬは兵隊船員ばかりなり。軍部は戦争の準備をし、米国で日本大使が交渉中の話を後々に聞く。その交渉決裂となり、大東亜戦争突入。私たちはグアム島敵前上陸に参加。その後海軍に引き渡し再度陸軍の兵隊を上船させ南へ南へと進路の前方に見える島をニューブリテン島と確認。船内は上陸準備で忙しく各点検。いよいよラバウル港に入港と同時に敵前上陸開始。無血で成功。輸送船二隻は港内待機。ところがラバウル港入口右端の小山火山が爆発。溶岩が流れ空高く花火のように飛散。この状態を目標に夜になると米機が空襲し機銃掃射と爆弾投下。初めての経験で船中で右往左往狭いところを逃げる大騒ぎ。その時、作戦に同行した水戸丸が爆弾を受け湾内で沈没する。翌朝ラバウルを出港、日本へ向かう。パラオ諸島近くで米潜水艦の魚雷攻撃を受け海上を白波をきいて我が商船に向ってくる攻撃を避けるため、右往左往と舵をきりながら逃げる。当たれば沈没する。我が会社他社の徴用輸送船が魚雷攻撃を受け沈没。範囲は狭く陸上と違い逃げる事すらできず精神的に沈没するまでの数分間、妻、子供、父母、兄弟の事が走馬灯の如く頭に浮かびこれが人生の最後かと思えば悔しいやら残念無念、苦しんだことだと思ふ。船友も次々と海底に沈み霊となる。現在に至るも家族の元に帰ることなく海底深く眠っている船友、兵隊の霊に謝しお祈りいたします。私も船員である限り何

時このような運命になるか神のみぞ知るところ。

広島宇品港へ入港軍部より船員全員に防寒服が支給された。行く先は寒冷地、さて何処か勘ぐる。命令が出た北海道小樽港に向け出港。日本海を北上、小樽港入港。風が強く大雪でとても寒い日でした。翌日から食糧、弾薬、速射砲、正月用品その他を積み昭和十七年十一月十五日小樽出港、駆逐艦一隻が護衛の任にあたり宗谷海峡通過、アツツ島に向って進路北東に。カムチャッカ半島過ぎた時点で米軍機の監視が厳しい状況故引き返し、占守島にて待機すること三回。護衛艦より今後単独行動するよう連絡を受けた。突然強風大雪となり目が開けておられないぐらい降り霧が濃い為見通しがわるいのを幸いに出港、見張りを前後左右にたてアツツ島へ進路をとり減速で航海を続ける。前方に島影が見え入港用意の指示があり船内は忙しく準備する。午前四時待望の目的地アツツ島西浦湾に入港するや湾の両岸穴から軍の舟艇数隻が本船両側にて荷物を積み折り返し荷物を引き取りに来る。順調に荷降ろし中、湾外上空に敵機襲来。B24, B25, P38、計9機が本船集中攻撃を開始。作業中の船員兵隊は本船中央の通路に逃げるが入りきれず、機関砲雨散の如く乱射され火災となり、あちこちで叫び声があり、積荷の弾薬に延焼し、爆音と共に花火の如く空に向って飛び散り、悲惨な状況下、空中魚雷二発を受け船体に穴が開き、水だあ—水だあ—と叫び声。船長は浅瀬に閣座。

船尾は海の中、船首は海上に姿あり。穴の開いたボートで負傷者戦死者を陸まで届ける。私たちは陸に上がり上陸したものの忽ち寝るところもない、強風と吹雪、寒くて、寒くて、暖をとることも出来ず、これから私たち船員四十名は軍部のお世話になる。つまり何も出来ない。極道息子のように食い潰し、軍部は食料が少なくなっているのに申し訳なく感じていました。明日からの空襲に備え、丘の麓に横穴を掘るよう、軍より指示があり、一人が入れる横穴を掘る。次は寝るところ。準備するため、軍のテントを借り設置。暖をとるため、丘へ登り猫柳の木を引き抜いて持ち帰り、燃やそうとしても生木故燃えなくて苦労した。夜中交替で火の番をする。手洗いへ行くのもひと苦労、テントから少しはなれた手洗いへ行き帰り擦れ違う際、突き当たり、ハツと驚くこと毎日あり、猛吹雪で下向き、目をつぶる等にて、このようなことがありました。夜が明けて間もなく米機が偵察にやって来ると、丘から空襲警報の知らせがあり、兵隊船員は横穴の中へ入り、敵機の様子をみていると、旋回しながら帰って行く、日によっては爆撃をして帰る、そのさい耐空射撃で応戦、敵機が帰ると丘の上から知らせがあり、横穴から出る、こんなことが毎日繰り返す。食事の知らせがあり、炊事場へ行き、もらって帰る。握り拳の半分位の握り飯一個と小指位の素干魚一匹が一日の食事でした。腹が減って腹が減って困るが軍の居候の為、船員皆我慢する。浜辺に

ながれついた野菜など拾らつて食べました。一日なにもすることなく虚しい日を過ごす。日本へ何時帰ることが出来るか、このままアツツ島で死ぬるのをまつのか、毎日毎日が不安で敵が上陸してきても、たとえば蟹の爪を全部取り去った状態と同じ私達船員はなさけない。対等に戦うことも出来ない。色々と考えれば考える程心の葛藤が一日一日重なつて夜になると、親、兄弟、友人の夢をよく見る様になりました。

上陸して以来一カ月近く過ぎた頃、突然軍より水上機母艦に改造された、君川丸が寄港するから「帰国の支度されたし」の連絡あり。支度をしていると警戒が厳しい為引き返す、と言う連絡が入る。夜になると大勢の兵隊さんが尋ねて来て『船員の皆さん、日本へ帰るのであれば、是非私たちの願いを聞いてもらえないか』と涙を流しながら、差し出された手紙を一人あたり三通から四通あずかる。その時兵隊さん曰く『我々はこの島に残るため、妻や子供、友人たちと二度と顔を見ることなく、話すことなく、この世を去る悲しさ、悔しさ、やりきれないような我々の気持ち。船員さんもわかってもらえるだろう。』言われてみれば、国のためといえど兵隊さんの悲壮な覚悟、死をおそれずその気持ちお互い抱き合つて涙。涙ですごした事を六十六年過ぎたいまも脳裏に残っています。

「船員さん、絶対秘密。憲兵に発見されたら機密漏えいの罪で死

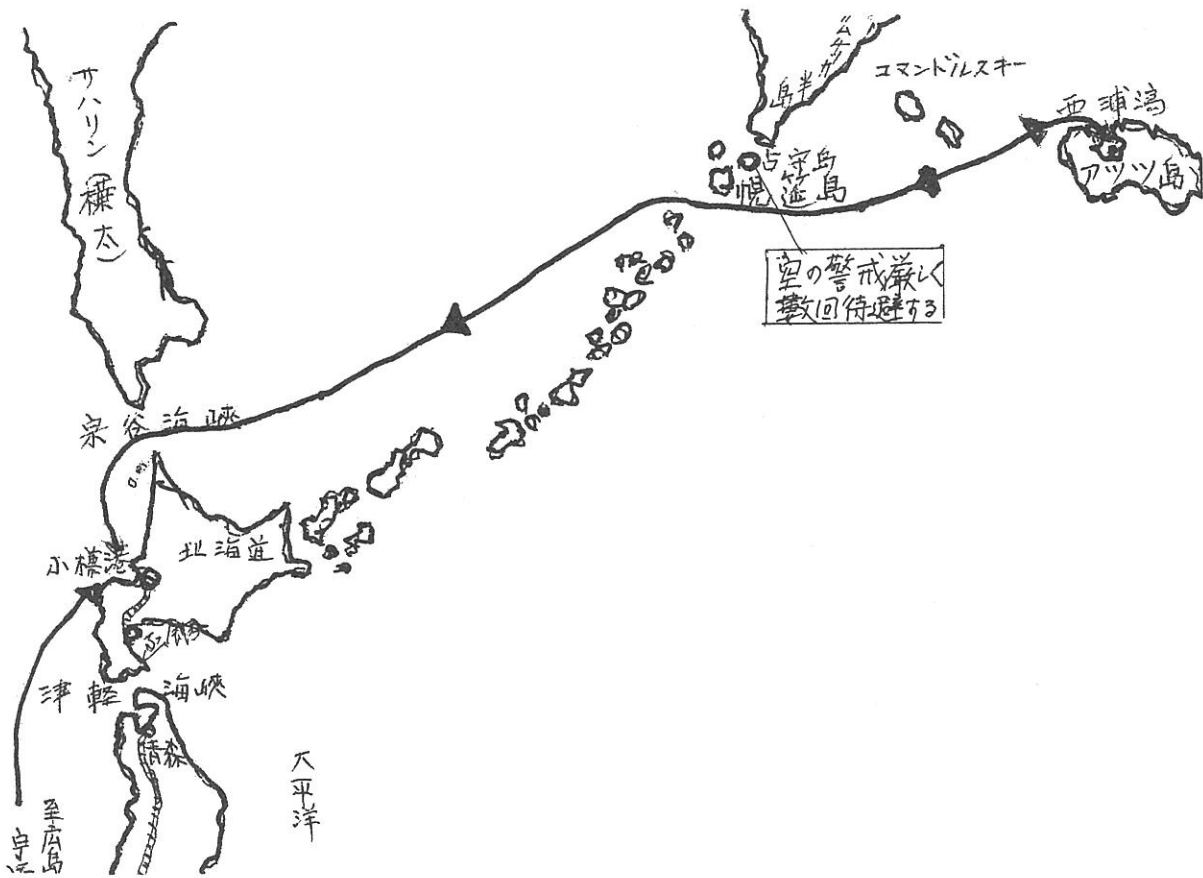
刑になるから発見されないよう、気をつけて手紙を必ずポストに投函して下さい。」と頼まれ、私たちアツツ島上陸以来、身体的安全と食料難で困っている中、兵隊と同等に扱って戴きお世話になったご恩に報いる為、死を覚悟で船員全員が引き受けたと思う。再度君川丸がアツツ島に寄港の連絡があり夜中に入港、兵隊さんに別れの挨拶またまた涙、涙、涙の別れでした。ただちに出港。流水に遭遇し驚きました。宗谷海峡を通過。日本海を経て、夢に見た小樽に入港接岸、検疫後上陸、其の際右と左に憲兵が立ち、眼を光らせており、心の動揺がありました。発見されず無事通過することが出来まして小学校にて休息、その間約束の手紙を投函し、お互いに約束を果たした喜びと、命拾いをした喜びが重なり、なんとなく涙が出た事を現在でも覚えています。私たちが帰国、半年後に全員玉砕。御霊を祈る。

小樽から広島宇品陸軍輸送司令部に帰り、徴兵検査を受け、甲種合格となり赤紙がくるのを待つ。次にハワイ丸に乗り兵器、兵隊をシンガポールまで輸送。任務を終わり広島に帰る途中、台湾近海に於いて、アメリカ力潜水艦の魚雷攻撃を受け、白波を切りながら本船に向ってくるので、舵を蛇行しながら魚雷を交わして難を逃れたものの、当たれば沈没海底の藻屑となる。広島に入港すると私に召集令状が届いていたので入営の為ハワイ丸を下船、軍属解除故郷へ帰りました。

私が下船後ハワイ丸は部隊千八百三十四名、輸送中に屋久島西方百五十キロメートル付近に於いて米潜水艦の魚雷攻撃を受け、沈没、兵隊と乗組員、全員海底の藻屑となり死亡、其の中の一人、プロ野球で活躍されました澤村英治投手が本船で戦死されました。大勢の兵隊さん、又私と寝食を共に過ごした船友が海底の藻屑になり、悲しい、悔しい、とても残念でたまらない。せめて遺骨だけでも、親、兄弟、妻子の手元に返して戴きたい。いまだに海底にしずんだままであり、国はどう思っているのか疑問に思う。あまりにも大きな賭博をした。なぜなら護衛艦なしで単独行動故、赤子の手を捻るが如く敵は自由奔放に攻撃をし、兵隊兵器を輸送する御用船を攻撃沈没作戦に切り替え後続を断ち、戦を有利にした。これも又日本の敗戦の一因でもあると私は思います。御用船が攻撃を受け、沈没までの数分間、兵隊船員は何を思い、何を考え水没したか、おそらく家族を思いながらさぞ無念であったと思います。私たち船員として籍を置く者でなければ心境を想像できないと思います。幾多の兵隊船員達の霊に合掌し、少しでも多くの皆さんに大東亜戦争に参加した船友の犠牲を知って戴ければ、海底に眠る船員兵隊が少しでも浮かばれるのではないのでしょうか。



グラム島 宵闇まぎれ
 敵前に
 上陸戦に 無血成功
 赤道下 南海の孤島
 ラバウルの
 椰子の葉陰で ラバウル小唄
 霧の間に 微かに見える
 島の影
 遂にアツツの 西浦港
 アツツ島 吹雪の中で
 荷卸しを
 敵の空襲 我が商船沈没
 終戦後 広島駅に
 降り立ちて
 唯茫然と 焼跡眺む



徴兵で

親戚一同

見送られ

徴兵に

人の命は

紙一枚

星一つ

違っただけで

威張る古兵

初年兵

ストーブ側で

暖とれず

戦友と

お上の御詔みこと

涙する



嵐は過ぎれど

帰る日も・・・
春も・・・

びびな糧でノルマ負い

苛酷な伐採

マイナス四十度

吹雪く山林

暁に祈る

共産党史 スターリン伝

まねた洗脳

アクティブの 反動？

吊し上げ！

生きてダモイは 加害者か？
心のしこり 未だに

渡邊芳治(倉治)

日本軍捕虜は、階級のある集団のまま作業大隊として編成されてシベリヤに抑留され、そのために将校や先任者から食糧、ノルマで苛酷な扱いをうけた兵士に栄養失調、過労で倒れ犠牲者が多く出た。酷寒の冬山、ノルマ未完の戒め・？にと、立ち木に括り付けられ朝まで放置され、頭を垂れ凍死。何かを祈るような姿から「暁に祈る」と・・・。抑留二年目ころから兵士達から階級廃止が叫ばれるようになったが、アクティブが民主化（共産思想）で、主導権を握り意に沿わぬ者を反動と吊し上げた。

(注) ※洗脳↓頭脳改造（共産思想の叩き込み）

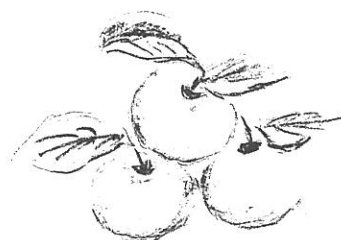
※アクティブ↓共産化など能動的になって始動

(洗脳、ノルマ達成に、ソ連側に協力した？)

※反動↓保守者

※ダモイ↓帰る（帰国）

(平成二十二年八月十五日)

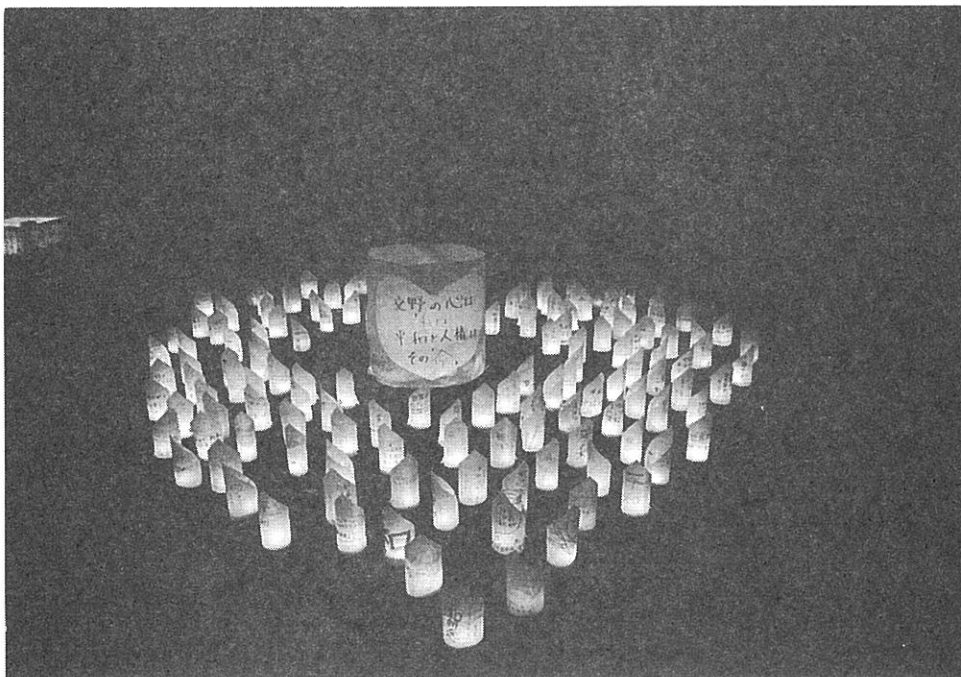


交野市市制施行40周年記念事業から



市内の子どもたちによる平和を祈念してキッズゲルニカを制作

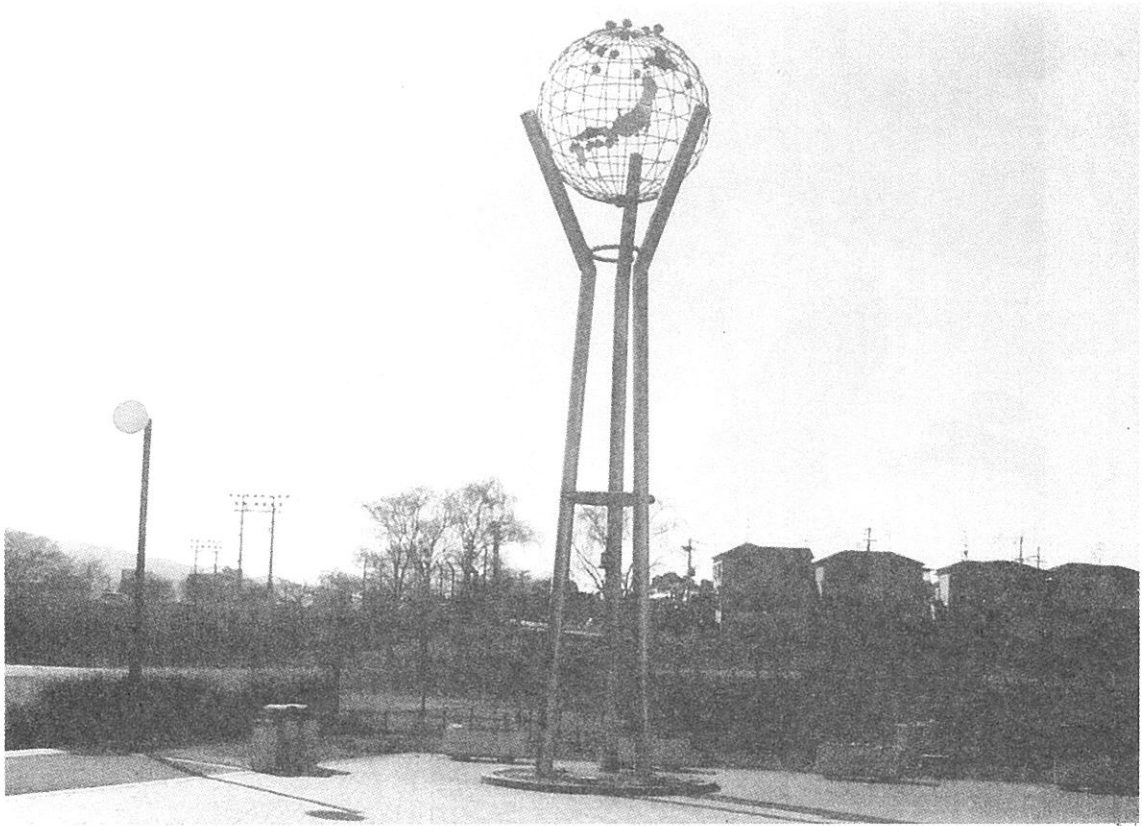
(交野市市制40周年記念事業 平成23年8月)



交野市市制40周年記念事業「織姫の里 天の川星まつり」で実施された

「エコキャンドルで平和の祈り」会場の1シーン

交野の平和と戦争関連モニュメントから



平和の鐘 (いきいきランド前広場)



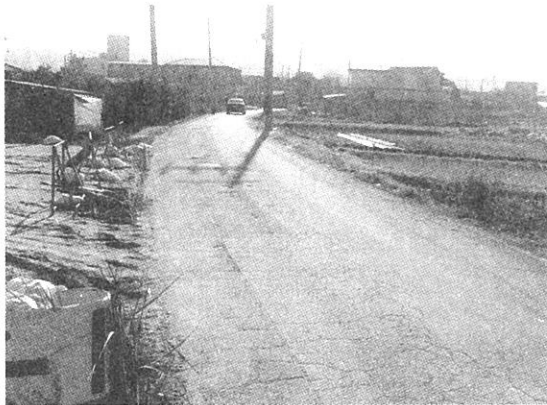
「平和と人権を守る都市宣言」碑 (いきいきランド前広場)



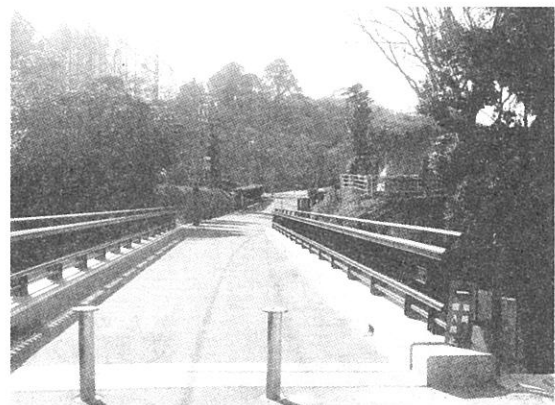
戦闘機「飛燕」発掘物展示 (いきいきランドロビー)



中村中尉鎮魂碑 (星田北6丁目)



片町線陸軍専用香里側線跡 (星田北)



私市興亜拓殖訓練道場跡 (大阪市立大学理学部付属植物園)



桂木斯小学校記念碑 (平和台霊園内)



忠魂碑 (私部会館横)



交野市原爆被爆者の会「祈念」碑 (ゆうゆうセンター前庭)



「愛と平和」碑 (ゆうゆうセンター前庭)

へい わ じんけん まも と し せんげん
平和と人権を守る都市宣言

あなたの^{つよ}強い^{ねが}願があるから
きっと ^{かく}核や^{せんそう}戦争はなくせる

あなたの^{あたた}暖かい^{あい}愛があるから
きっと ^{さべつ}差別や^{ぎゃくたい}虐待はなくせる

^{かたの}交野の^わころは「和」

「^{へい}平和と^{じんけん}人権」はその^{いのち}命

かけがえのないものを
あなたと^{とも}共に^{まも}守り^ぬ抜きたい

そして さらにその^わ輪が
^{ぜんちきゆう}全地球に^{ひろ}広がることを^{ねん}念じ

『^{ひかく}非核・^{きょうせい}共生・^{ひぼうりよくとし}非暴力都市 ^{かたの}』

を ^{せんげん}ここに宣言します。

平成 13 年 11 月 3 日

交野市

City Declaration on Observance of 'Peace and Human Rights'

With our strong will, we can eliminate nuclear weapons and wars.

With our love, we can eliminate discrimination and abuse.

The spirit of Katano is "WA" or "Peace."

The desire for peace and the respect for human rights are at
the heart of Katano.

Together we stand and together we protect what is precious in life.

We wish that this circle of hope extends to and unites all people
throughout the world.

Based on our commitment to these principles, we hereby
declare Katano to be a

"Non-nuclear, abuse-free city with compassion for all humanity."

November 3 r d, 2001

City of Katano

あとがき

「平和の礎」第三集発刊の運びとなりました。

「あの時代」を知らない世代が増える中、皆様の体験記を読ませて頂き、改めて、語り伝えていくことの責任の重大さを痛切に感じます。

昨年、日本国民は東日本大震災とその後の原発事故で大変な体験をしました。今、「いのち」について考えさせられています。

これから「いのち」が大切にされる時代を築いていくため、私達はそれを歴史から学ばなければなりません。「平和の礎」がそのひとつになることを願ってやみません。

寄稿下さいました皆様ありがとうございます。

(玉井 記)

編集者 平和継承事業部会

編集委員 可児 義明

〃 水上 隆邦

〃 住井 麗子

〃 玉井 八恵子

事務局 樋口 和美

『平和の礎(いしずえ)』

― 交野市在住者の戦争体験集 ―

平成二十四年三月発行

発行者

交野市『平和と人権を守る都市宣言』を
進める実行委員会

交野市私部一丁目一番一号

電話〇七二一八九二一〇二二

印刷 株式会社 加地

電話〇七二一八九二一〇〇〇一

